

# 華嚴宗元興寺所蔵石造物 調査報告書

令和3年2月

公益財団法人元興寺文化財研究所







五重大塔礎石オルソ画像（上が北）





五重大塔礎石全景（北西から）



五重大塔礎石全景（西から）

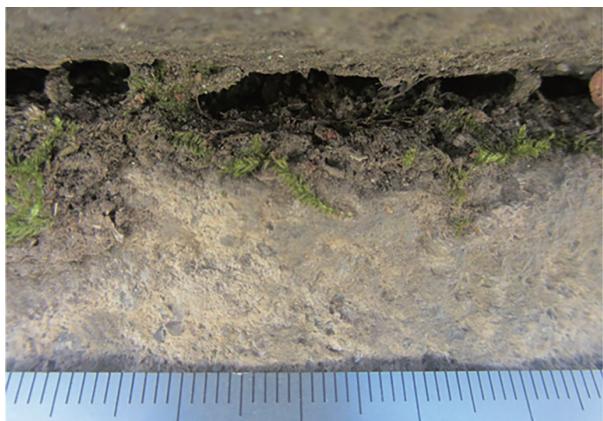




啼燈籠



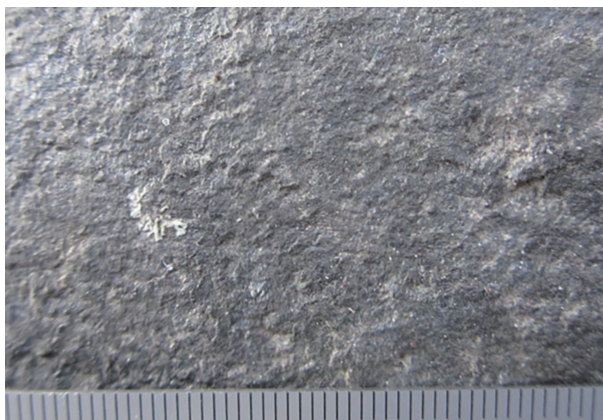
卷頭図版 4



No.31-1 下



No.31-2 下



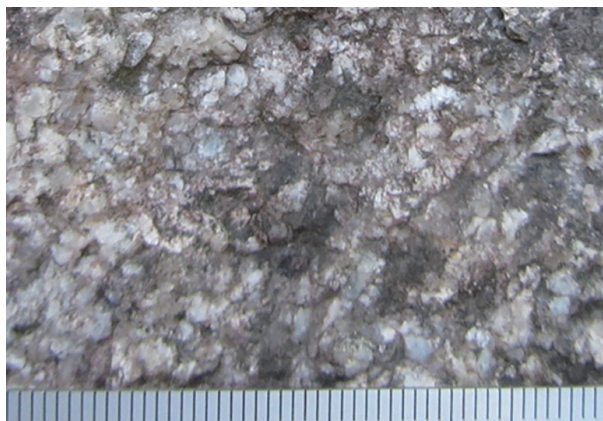
No.33-1



No.33-2



No.33-3



No.33-4



No.33-5



No.33-6





No.33-7



No.33-8



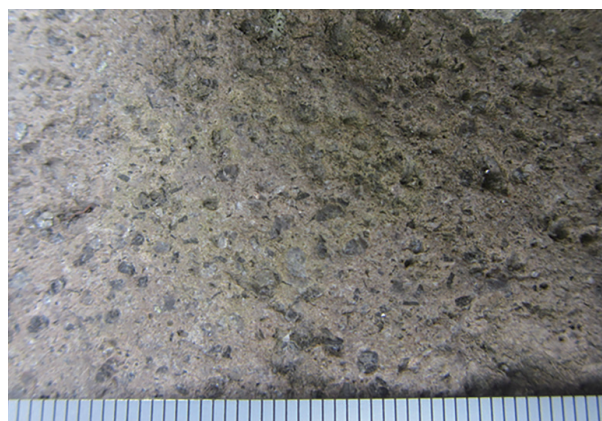
No.33-9



No.33-10



No.42



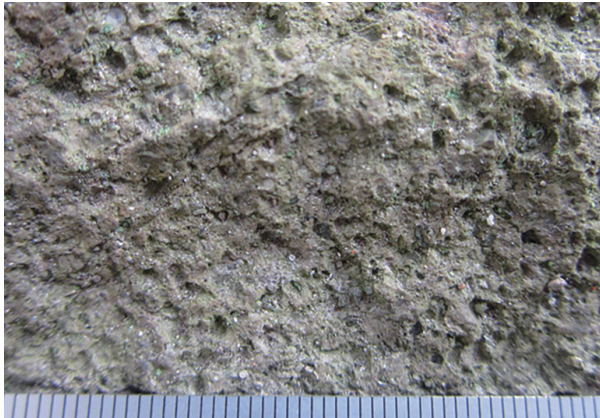
No.54



No.87



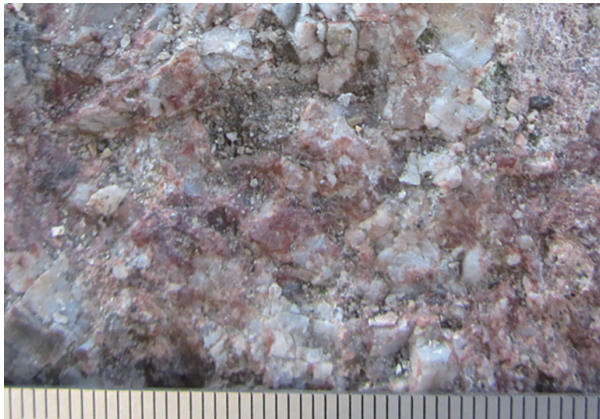
巻頭図版 6



No.101



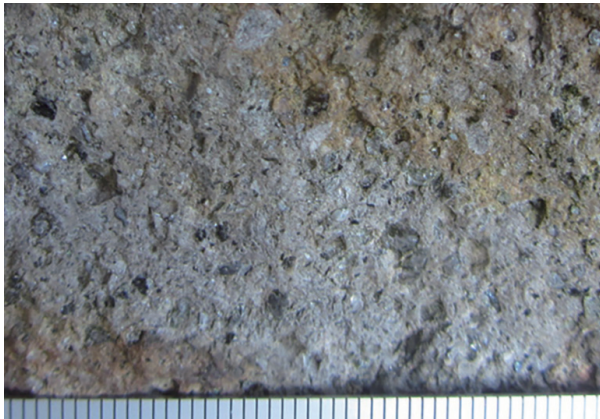
No.102



No.103



No.104



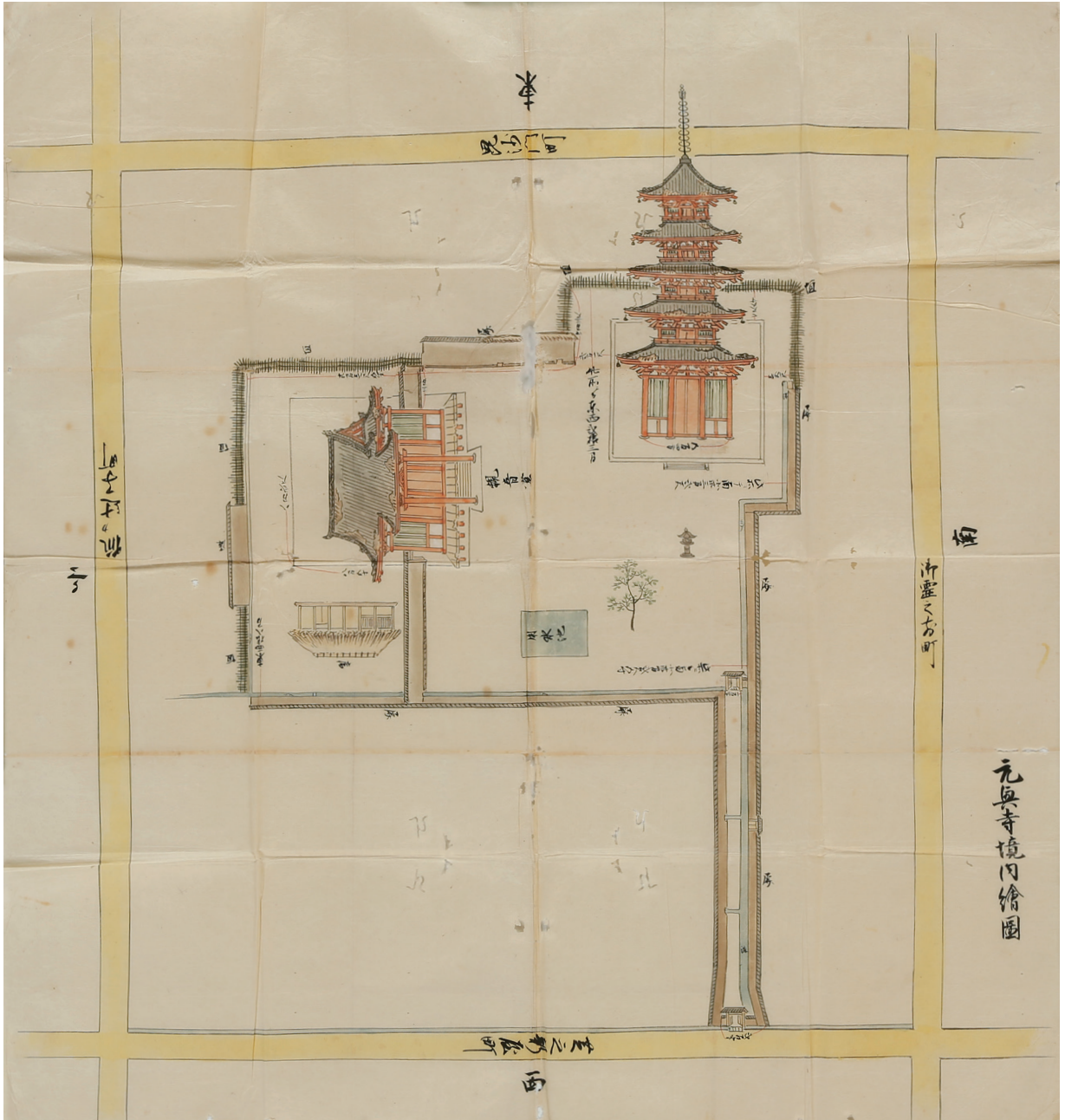
No.105



比較資料：宇陀市室生区向湊飯降磨崖仏周辺採取の石材

礎石石材拡大写真 (3)





元興寺境内繪圖 (補遺 1-2)





## 序

南都七大寺のひとつであった元興寺は、今日まで法灯を継ぎ、平成30年（2018）に平城京に創建されてから1300年という年を迎えました。

当研究所では、これを記念した様々な行事を真言律宗元興寺、華嚴宗元興寺、真言律宗小塔院の三ヶ寺とともに共催しました。展覧会や講演会では、前身となる法興寺（飛鳥寺）や平城京への移転、中世から現代に至る歴史を振り返り、元興寺が日本列島の仏教史や歴史において重要な位置にあることを再認識することができました。多くの一般市民の皆様にも少なからず知っていただく機会となったと考えております。

この諸行事の成果は、『日本仏教はじまりの寺 元興寺－1300年の歴史を語る－』、『図説元興寺の歴史と文化財－1300年の法灯と信仰－』の2冊の書籍として令和2年（2020）11月に刊行いたしました。学術的にも一つの到達点と考えており、今後の研究進展に寄与することを願っております。

さて、当研究所では平成31年（2019）より華嚴宗元興寺所蔵の未調査資料について調査研究を進めてまいりました。今回は、境内に残る安政6年（1859）に焼失した五重大塔跡の礎石、毎夜ないたという言い伝えが残る石灯籠などの石造物に焦点をあて、考古学的な知見から調査研究を進めました。いずれも元興寺の歴史を語るうえで重要な資料であり、今後の研究発展のために欠かせない基礎資料が得られたと考えております。

最後になりましたが、本調査の実施に当たっては、華嚴宗元興寺住職の池田圭俊様、前田圭廣様には多大なるご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

令和3年2月28日

公益財団法人元興寺文化財研究所  
理事長 辻村泰善

## 例言

1. 本書は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施した令和2年度「華嚴宗元興寺所蔵歴史資料の基礎的調査研究事業」の成果報告書である。
2. 第1～4章本文中のNo. は表1～6境内石造物一覧の資料番号を示す。
3. 報告書の作成にかかる現地調査は、令和2年7月から令和3年1月にかけて実施し、小林友佳（奈良大学）、岸上維颯（同）、松田青空（同）が補佐した。
4. 本書の編集は村田裕介（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行い、芝幹（同）がこれを補佐した。執筆担当は各文末に記載した。
5. 五重大塔基壇の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、オルソ画像の作成は株式会社文化財サービスが分担した。
6. 礎石および「啼燈籠」の実測と採拓、写真撮影は各担当者が協力して行い、絵図面類の写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）、浄書は芝が行った。
7. 本研究の遂行にあたり、下記の方々のご協力を得ました。記して感謝申し上げます（敬称略・五十音順）。  
池田圭俊（華嚴宗元興寺）、前田圭廣（同）

## 目次

序 章 本調査・研究の趣旨と目的	1
第1章 華嚴宗元興寺の石造物	3
(1) 概要	3
(2) 中世の石造物	3
(3) 近世の石造物	4
(4) 近代以降の石造物	4
第2章 本堂周辺の礎石について	12
(1) 概要	12
(2) 礎石の石材と形状	12
(3) 火山礫凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩製礎石について	16
(4) 榛原石製礎石の類例 興福寺食堂の礎石	16
(5) 榛原石の利用と飛鳥寺の礎石	17
(6) 小結	18
第3章 五重大塔礎石	19
(1) 概要	19
(2) 本調査の方法と成果	19
(3) 考察	22
(4) 小結	23
第4章 啼燈籠	24
(1) 由緒	24
(2) 研究史	25
(3) 本調査の目的とねらい	27
(4) 規模と概要	27
(5) 考察	29
(6) 小結	30
第5章 古文書(補遺)	32
(1) 近世・近代史料	32
(2) 図面類	33
第6章 結語	42

## 図版目次

図1 境内石造物配置図	5
図2 礎石帯磁率分布図	12
図3 境内礎石実測図(1)(S=1/20)	14
図4 境内礎石実測図(2)(S=1/20)	15
図5 興福寺食堂礎石出土状況	17

図 6	飛鳥寺回廊礎石出土状況	17
図 7	礎石配置図	19
図 8	五重大塔礎石実測図 (S=1/80)	20
図 9	五重大塔礎石柱間寸法 (S=1/150)	21
図 10	五重大塔礎石帯磁率分布図	21
図 11	『大和名所図会』に見える二基の灯籠	24
図 12	奈良皇室博物館に寄託中の「啼燈籠」	25
図 13	明治以前の「啼燈籠」の描画	26
図 14	天沼俊一が作成した「啼燈籠」の図面	26
図 15	高田十郎採拓の拓本	26
図 16	「啼燈籠」実測図 (S=1/15)	28
図 17	地震による倒壊前後の拓本比較	29

## 写真図版目次

巻頭図版 1	五重大塔礎石オルソ画像 (上が北)	図版 19	大和国添上郡南都七大寺之内真言宗元興寺 (補遺 1-1)
巻頭図版 2	五重大塔礎石全景 (北西から)		元興寺境内絵図 (補遺 1-2)
	五重大塔礎石全景 (西から)	図版 20	
巻頭図版 3	啼燈籠		元興寺境内絵図 (補遺 1-3)
巻頭図版 4 ~ 6	礎石石材拡大写真		観音堂仮殿 (補遺 1-18)
巻頭図版 7	元興寺境内絵図 (補遺 1-2)	図版 21	[元興寺周辺実測図] (補遺 1-10)
図版 1 ~ 3	境内礎石		元興寺寺院境内実測図 (補遺 1-6)
図版 4 ~ 18	境内石造物	図版 22	大正八年十二月九日整理奈良市芝新屋町 元興寺境内一部分貸地調査図 (補遺 1-25)
			元興寺境内実測図 (補遺 1-9)

## 表目次

表 1 ~ 6	境内石造物一覧	6 ~ 11
表 7	五重大塔礎石のデータ	22
表 8 ~ 12	華嚴宗元興寺古文書目録 (補遺)	37 ~ 41

## 序章 本調査・研究の趣旨と目的

華嚴宗元興寺（奈良市芝新屋町）は、元興寺観音堂と五重大塔の跡を継承し、元興寺僧房・極楽房（極楽坊）から発展した真言律宗元興寺（奈良市中院町）、小塔堂・吉祥堂から発展した真言律宗小塔院（奈良市西新屋町）とともに今日に元興寺の法灯を伝える古刹である。

観音堂と五重大塔は安政6年（1859）の火災によって焼失したものの、境内地は「元興寺塔跡」として昭和7年（1932）4月に国史跡に指定され、基壇や礎石が保全されている。この他、木造薬師如来立像（国宝、昭和27年11月指定）や木造十一面観音立像（重文、明治33年4月指定）、元興寺塔址土壇出土品（同、昭和8年1月指定）、不動明王坐像（市指定、平成元年3月指定）などの貴重な文化財が知られている。

当研究所では、飛鳥の地から平城京への移転後1300年の記念となる平成30年（2018）に華嚴宗元興寺、真言律宗元興寺、真言律宗小塔院の三ヶ寺とともに展覧会や講演会などの学術行事を共催した。その準備過程で華嚴宗元興寺に指定物件以外の未調査資料が多数残されていることを伺い、展覧会開催のための簡易な調査を経て、令和元年度から古文書、聖教・経典、絵画、位牌、工芸品など各分野の詳細かつ悉皆的な調査を進めている。その成果については、展覧会図録である『仏法元興』（真言律宗元興寺・華嚴宗元興寺・真言律宗小塔院・元興寺文化財研究所（編）2018）、『大元興寺展』（同）や連続講座『元興寺文化財研究所実践文化財学 元興寺創建千三百年 その歴史と寺宝』、これらの要旨をまとめた服部光真「江戸時代の元興寺と奈良町」（『元興寺文化財研究所研究報告2018』（公財）元興寺文化財研究所2019）、元興寺創建千三百年記念事業を総括した『日本仏教はじまりの寺 元興寺－1300年の歴史を語る－』（吉川弘文館2020）、『図説元興寺の歴史と文化財－1300年の法灯と信仰－』（同）で一部報告しているほか、『華嚴宗元興寺所蔵歴史資料調査報告書』（公益財団法人元興寺文化財研究所2020）において詳細に報告している。

令和元年度の調査では、近世・近代の華嚴宗元興寺の歴史や什宝物、境内の変遷に関わる重要な歴史的情報を含む資料群が見出され、指定物件の伝来や履歴を知るうえでも大きな成果を上げることができた。令和2年度は、安政6年（1859）の火災以前の境内地の様相や信仰のあり方を探るべく石造物を対象に調査を実施し、五重大塔や旧観音堂の礎石をはじめ、かつて重要美術品に指定されていた通称「啼燈籠」の実測図を作成し、検討の基礎資料とした。その成果をまとめたのが本報告書である。

華嚴宗元興寺は、元興寺旧伽藍における東塔院にあたり、五重大塔を中心に檜皮葺五間二面堂と瓦葺十二間僧房一行を中門と脇門を伴う回廊が取り囲んでいた。元興寺の影響力の衰退と伽藍が縮小する中でも五重大塔は維持・修復され、鎌倉時代には観音堂が成立するなどの動きがあったのち江戸時代には観光名所となった。安政6年（1859）の焼失が無ければ、元興寺極楽坊本堂や禅室に並ぶ古代・中世以来の大規模建築物が現存していた可能性がある。建物が焼失した現在では、礎石や基壇などから過去の様相を復元していく以外に方法はなく、五重大塔跡においては昭和2年（1927）に基壇の実測調査に際して発掘調査が行われているが、その後の検証は十分に行われていない。観音堂跡は、昭和5年（1930）の復興に際して現在の本堂が建てられたため詳細な研究はなく、また、通称「啼燈籠」は倒壊と修復を繰り返して現在に至る。

令和元年度から行っている華嚴宗元興寺所蔵の文化財総合調査は、元興寺の歴史全体を捉え直すうえでの基礎調査の蓄積を目指し、先行研究の発展的な検証を意図したものである。本研究の成果は、五重大塔をはじめ、通称「啼燈籠」などの研究に一石を投じるものとする。本調査を円滑に実施することができたのは、華嚴宗元興寺池田圭俊住職、前田圭廣氏の多大なるご協力を得たことによる。ここに記して、感謝申し上げる次第である。

以下、本論第1章では華嚴宗元興寺に所在する石造物を時代ごとに概観する。第2章では本堂周辺に分布する礎石、第3章では五重大塔礎石について検討し、第4章では通称「啼燈籠」について概説する。また、第5章では古文書の補遺を掲載する。本報告書が、様々な分野で活用されることを願うものである。

(坂本 俊)

## 第1章 華嚴宗元興寺の石造物

### (1) 概要

華嚴宗元興寺には古代の堂舎礎石から近現代の標石まで、総数 293 点におよぶ石造物が存在する。華嚴宗元興寺の石造物については、五重大塔基壇礎石が大塔の建築学的関心から注目され、昭和 2 年（1927）には基壇礎石の測量調査が行われている。この際、礎石の据え付け状況を明らかにするために発掘調査が行われ、基壇鎮壇具が発見されたことは有名である。また、現在本堂前に復元されている正嘉元年（1257）銘啼燈籠も戦前より著名であり、天沼俊一氏の実測調査をはじめ学術的な調査が行われてきた。

ただし、華嚴宗元興寺境内にはこれら以外にも多くの石造物が存在し、なかには古代の礎石や、中世に遡る石塔など、貴重な歴史資料たりえるものが存在している。本章ではまずこれら境内石造物の悉皆データを提示し、全体像を把握したい。なお、大塔基壇礎石、本堂周辺の礎石、本堂前石灯籠については別章を設けて詳述する。

### (2) 中世の石造物

華嚴宗元興寺境内には礎石を除いて古代の石造物は確認できない。また、中世の石造物も正嘉元年銘石灯籠を除くと紀年銘資料としては天文 10 年（1541）銘墓標（No.79）が最古であり、大半が 16 世紀末から 17 世紀初頭の石龕仏（箱仏）、地藏立像である。石龕仏の中には No.37 のように 15 世紀に遡るものも存在しているが、石仏には当該期のものは見られない。

本堂東北付近には室町期に遡る組み合わせ式石塔が存在している。石塔は大半が五輪塔で、宝篋印塔がこれに次ぐ。石塔類は寄せ集めばかりであり、当初の組み合わせを保つものは確認できない。

五輪塔は大半が四門梵字を四方に刻むが、中には水輪にキリクを刻むものも見られる（No.51・54・56・68）。本来五輪塔は阿弥陀と大日の一体を解く覚鑿の思想から生まれたものであり、阿弥陀信仰を取り込んだものであるが、南都では伝統的に阿弥陀信仰が強く、水輪にキリクを刻む五輪塔が多くみられる。本例もこうした南都の阿弥陀信仰を示す資料である。同様に阿弥陀の名号を刻んだ六字名号碑（No.9-12・52・58・61）も阿弥陀信仰の広まりを示すものであるが、No.9-12 は半截五輪塔に名号を刻んでおり、五輪塔と阿弥陀信仰の融合を示す。

No.56 は一石五輪塔である。一石五輪塔は奈良盆地北部では比較的少なく、本資料が示す 16 世紀前半は特に少ない時期であり貴重である。銘文に刻まれる芙秀については不明である。

No.55 の基礎は区画と格狭間を持ち、一見宝篋印塔基礎のようにみえるが段形がなく、段形を削り落とした様子も確認できないことから、宝塔基礎と考えられる。このような小型宝塔の類例としては桜井市長谷寺所在永正 5 年（1508）銘宝塔が挙げられ、本資料も 16 世紀のものと考えられる。ただし大和においては宝塔が圧倒的に少なく、特に 16 世紀のものはほとんど類例を見ない。

地藏堂には 67 基の石仏があり、このうち 46 基が石龕仏（箱仏）である。華嚴宗元興寺中興水野圭真による『元興寺記録』昭和 5 年（1930）8 月 23 日の記録では、境内整備工事中に土中から出たものや、敷石に使用されていた地藏尊 50 余軀を蛇池の南に屋形を設けて納めるとしており、これらの石仏が境



内由来のものであることがわかる。石龕仏および地藏立像の年代を決めることは難しいが、大型で彫が深く、石仏の目鼻を描くものを室町時代（戦国期を含む）とし、小型で掘り込みの浅いものを江戸時代（安土桃山期を含む）とした場合、その内訳は室町時代 23 基、江戸時代前期のもの 44 基となる。

これらの石仏は墓地の地上標識として使用されたものであるが、近隣では極楽坊周辺に当該期の墓地が展開していたことが明らかになっている。ただし、17 世紀初頭までの元興寺伽藍域は各堂舎の境界がまだあいまいで、金堂基壇跡からも蔵骨器と考えられる土師器釜の埋納遺構が見つかるなど、極楽坊以外にも墓地が広域に存在したことが判明しており（奈良県教育委員会 1974）、華嚴宗元興寺境内にも墓地が及んでいたことも考えられる。ただし、当該期に最も普遍的にみられるはずの舟形五輪塔がみられないなど石造物の組成に不自然な点があり、今後の発掘調査による墓地遺構の発見を待ちたい。

### (3) 近世の石造物

近世の石造物は中世、近代に比して非常に少ない。その大半は地藏堂に所在する 17 世紀第 2 四半期以前の石仏であり、これ以外では第 4 章で述べる延享 5 年（1748）銘石灯笼（No.12）や文化 9 年（1812）銘石仏（No.38）、「十九所社」銘手水鉢（No.19）などがある。

No.18 は標石である。安永 6 年（1859）の大塔焼亡の際に被熱したと考えられ、著しく破損する。正面に「[ ]子／元興寺」、右側面に「芝之新屋町□師弥兵衛」と刻む。正面上半は「太子」と刻まれていた可能性もある。

いずれにしても近世の石造物については著しく史資料が少なく、詳細が不明である。

### (4) 近代以降の石造物

近代以降の石造物については、特に水野圭真入部以降のものが多く、また同氏著『元興寺記録』に石造物造立の経緯が明記されているものが多い。

No.1 は境内入り口に置かれた史跡標石であるが、寄進者は中国山東省青島市周村路の中谷藤二郎である。昭和 10 年（1935）『仏教新聞』には水野圭真の山東省布教についての記事が連載されており、この旅で得た繋がりをもとに寄進を受けたものと考えられる。

No.2 は大正 7 年（1918）元興寺標石である。住職窪田慧玉については資料が少なく詳らかではないが、新出史料によって在任の事実が判明している（第 5 章参照）。施主宇宙庵吉村長慶は奈良町を中心に各地で石造物を造立した豪商・政治家・宗教家であった。水野圭真入部以前の石造物はこれ以外には吉村長慶の布教拠点を示す「三山吞倉」の碑（No.4）、No.62・64 の墓標しかなく、この時代の石造物造立活動は低調であったようである。

No.3 の門前玉垣には京都、大阪、奈良に加え博多や松江、二瀬（福岡）など広域の人々の名前が刻まれる。いずれも「法興会」の構成員と考えられるが、『元興寺記録』昭和 7 年（1932）1 月元旦には京、大阪、木津の信者を集め、一層の信心を誓う誓願を記述し、1 月 8 日の条ではこの集まりを「法興会」と命名する旨が記される。玉垣の設置は法興会の結成と近似する時期のことと推定できる。

No.6 は灯笼である。大阪の信者西田多一郎氏による寄進であるが、『元興寺記録』昭和 6 年（1931）8 月 1 日条にこの灯笼の寄進記録が残る。なお、材質は凝灰岩であり、他地域で製作されたものを搬入したと考えられる。

No.8 は吉田公一、吉田宏之助の名を刻む花立であるが、『元興寺記録』昭和 7 年（1932）1 月 19 日条には芝新屋の吉田高次氏によって地藏堂前の石彫花立が施入された記録がみられる。公一・宏之助は



供養者名であろうか。なお『元興寺記録』によると石工は南京終田中為三郎とある。

No.26 仏足石は側面の銘文から『元興寺大鏡』刊行を記念して奉納されたことがわかる。『元興寺大鏡』は南都十大寺大鏡の第3巻として東大寺大鏡と合本で刊行されたものであり、東京美術学校の編集、大塚巧芸社による刊であった。図様は薬師寺仏足石に範をとった双式仏足石である。本資料の図様については当寺所蔵仏足跡版木（工芸 No.9）を下図としている。この版木はもともと元興寺に伝わっていたものがいつの頃か東大寺宝珠院へ持ち去られ、これを清水公俊の仲介で当寺へ戻したものである。

No.31 は凝灰岩製礎石の上に破損した花崗岩製礎石を置く。花崗岩製礎石は建築物のものに類似するが規模が大きく、また建物礎石とするには位置にも問題がある。『元興寺記録』昭和6年（1931）12月25日条には本堂正面石段下に木製祇堂大形春日灯籠を2基建立した記録があり、この灯籠の基礎石であった可能性もある。

（佐藤亜聖・角南聡一郎）

《参考・引用文献》

奈良県教育委員会 1974『元興寺金堂跡発掘調査概要報告書』

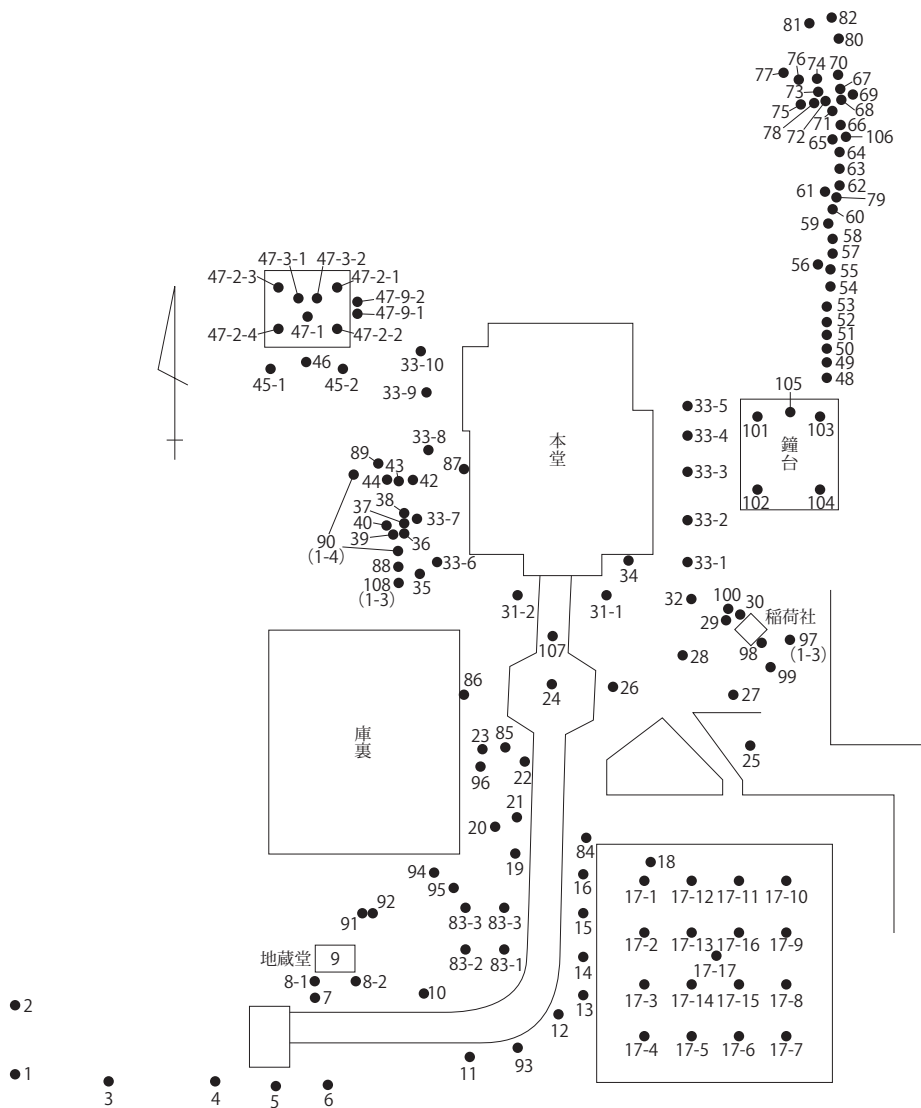


図1 境内石造物配置図

表1 境内石造物一覧(1)

資料番号	名称	所在	材質	法量			銘文	時期		備考		
				高さ	幅	厚さ (奥行)		区分(和暦)	西暦			
1	方角柱碑(標石)	山門付近	花崗岩	282.0	63.0	64.0	【正面】史蹟元興寺塔址 【左側面】青島周村路/中谷藤治郎	近代				
2	方角柱碑(標石)	山門付近	花崗岩	139.0	25.5	16.5	【正面】元興寺 【右側面】大正七年夏建立 【左側面】当山住職/窪田慧玉/山本秀顕 【裏面】住当山中門南隣定座京都嵯峨小倉山/施主 宇宙庵 吉村長慶	大正7	1918			
3	1	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	77.5 前後	15.5 前後	14.5 前後	【正面】(大阪)/伊庭榮太郎	近代				
3	2	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/伊庭次郎					
3	3	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/伊庭三郎					
3	4	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/伊庭五郎					
3	5	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/伊庭信十郎					
3	6	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/伊庭たまの					
3	7	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/伊庭熊太郎					
3	8	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/伊庭敏子					
3	9	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/伊庭まさ系					
3	10	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/井上次子					
3	11	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/西川ツル					
3	12	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/西川孝一					
3	13	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(伏見)/西村圭隆					
3	14	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/池田勝三郎					
3	15	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(伏見)/西村加代					
3	16	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】法興會					法興會は昭和7年に結成
3	17	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】法興會					
3	18	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/大谷初子					
3	19	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(松江)/景山萬次郎					
3	20	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(松江)/景山久子					
3	21	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/西川多一郎					
3	22	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(奈良)/笠本かつ					
3	23	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(奈良)/吉田高治					
3	24	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(奈良)/吉田公一					
3	25	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/米田康一					
3	26	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/米田キクエ					
3	27	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/米田善子					
3	28	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(伏見)/西村有央					
3	29	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(二瀬)/高橋幸市					
3	30	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(二瀬)/高橋三和					
3	31	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(奈良)/辻井貞子					
3	32	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(奈良)/山田彌七郎					
3	33	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(博多)/小林市太郎					
3	34	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(博多)/小林松枝					
3	35	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近				【正面】(大阪)/大垣よね					
3	36	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】東榮/山樓/國分くま								
3	37	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(博多)/與光光[ ]								
3	38	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/西川あさの								
3	39	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/西川千代子								
3	40	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(奈良)/神嘗かつ								
3	41	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(道原)/延吉初恵								
3	42	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(奈良)/吉田ヨシ								
3	43	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(奈良)/吉田トヨ								
3	44	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/中西良夫								
3	45	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/井上利三								
3	46	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/奥郁枝								
3	47	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(御影)/渡邊定太								
3	48	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(二瀬)/高橋和三								
3	49	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(二瀬)/高橋季子								
3	50	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(奈良)/岡田松次郎								
3	51	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(奈良)/岡田アキ								
3	52	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/奥登喜								
3	53	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/北岡孝三郎								
3	54	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/北岡町子								
3	55	尖頭状石碑(玉垣)	山門付近	【正面】(大阪)/宮崎奇男								
4	方角柱碑(標石)	山門付近	花崗岩	183.0	24.5	15.8	【正面】三山吞倉入口 倉主宇宙庵	近代				
5	水受	地藏堂付近	花崗岩	40.5	74.2	40.0	【正面】(奉納)	近代				
6	灯籠	地藏堂付近	凝灰岩	180.0	64.0	55.0	【竿部正面】照閣/大阪/西川多一郎	近代		昭和6年に寄進記録アリ		
7	線香立	地藏堂付近	花崗岩	86.0	43.5	43.5	【正面】卍 【右側面】吉田ます	近代				
8	1	花立	地藏堂付近	花崗岩	56.4	23.7	26.4	【正面】卍 【右側裏面】吉田公一 【左側裏面】吉田宏之助	近代		昭和7年に寄進記録アリ	

表2 境内石造物一覧(2)

資料番号	名称	所在	材質	法量			銘文	時期		備考
				高さ	幅	厚さ (奥行)		区分(和暦)	西暦	
8 2	花立	地藏堂付近	花崗岩	56.0	20.5	20.5	【正面】卍 【右側裏面】吉田公一	近代		昭和7年に寄進記録アリ
9 1	浮彫石仏	地藏堂内	花崗岩	25.5	29.0	10.0		江戸		
9 2	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	39.5	26.0	11.5	【正面】妙珍	江戸		
9 3	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	安山岩	25.5	20.5	8.0	【正面】妙光	江戸		
9 4	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	安山岩	31.5	23.0	9.0	【正面】祐善	江戸		
9 5	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	34.0	20.5	8.0		江戸		
9 6	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	粘板岩	39.5	19.0	7.0	【正面】祐清	江戸		
9 7	箱仏(三尊立像)	地藏堂内	花崗岩	34.0	57.5	9.5		室町		
9 8	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	74.5	36.0	22.0	【正面】(梵字・[ ])	室町		
9 9	丸彫石仏 (地藏菩薩坐像)	地藏堂内	花崗岩	103.0	63.5	63.0		江戸		
9 10	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	45.0	31.0	9.5		室町		
9 11	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	48.0	21.5	15.0		室町		
9 12	半裁五輪塔	地藏堂内	花崗岩	45.0	22.5	14.0	【正面】南無阿弥陀[ ]	室町		
9 13	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	39.0	19.0	9.0	【正面】西道	江戸		
9 14	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	36.0	34.0	12.0		江戸		
9 15	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	38.0	23.0	7.0		江戸		
9 16	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	安山岩	29.0	18.5	10.0	【正面】宗西	江戸		
9 17	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	40.5	26.0	13.0		室町		
9 18	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	27.0	16.5	7.0		江戸		
9 19	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	27.0	18.5	7.0		江戸		
9 20	箱仏(二尊立像)	地藏堂内	花崗岩	30.0	27.5	8.0		江戸		
9 21	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	31.0	22.0	8.5		江戸		
9 22	箱仏(二尊立像)	地藏堂内	花崗岩	34.0	26.0	9.5		室町		
9 23	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	35.5	21.0	9.0		室町		
9 24	箱仏(二尊立像)	地藏堂内	花崗岩	34.5	31.0	9.0		江戸		
9 25	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	35.0	22.0	9.0		江戸		
9 26	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	35.0	19.0	9.0		江戸		
9 27	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	26.0	19.0	9.0		江戸		
9 28	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	19.5	19.5	9.0		江戸		
9 29	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	45.5	30.0	9.0		室町		
9 30	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	45.0	32.0	9.0		室町		
9 31	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	43.0	27.0	9.0		江戸		
9 32	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	40.0	18.0	9.0		江戸		
9 33	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	31.0	22.0	7.5		江戸		
9 34	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	33.5	20.0	12.0		江戸		
9 35	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	36.0	24.0	9.0		江戸		
9 36	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	30.0	17.0	9.0		江戸		

表3 境内石造物一覧(3)

資料番号	名称	所在	材質	法量			銘文	時期		備考	
				高さ	幅	厚さ (奥行)		区分(和暦)	西暦		
9	37	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	30.0	18.0	9.0		江戸		
9	38	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	43.0	25.0	9.5		江戸		
9	39	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	35.0	14.0	9.0		江戸		
9	40	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	35.0	22.0	9.0		江戸		
9	41	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	48.0	26.0	9.0		室町		
9	42	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	63.0	34.5	13.0		室町		
9	43	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	52.0	25.0	9.0		江戸		
9	44	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	70.0	18.5	9.5		江戸		
9	45	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	32.0	22.5	10.5		江戸		
9	46	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	36.0	23.0	9.5		江戸		
9	47	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	39.0	23.0	9.0		室町		
9	48	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	27.0	26.0	9.0		室町		
9	49	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	39.0	25.0	9.0		室町		
9	50	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	41.0	22.5	9.0		室町		
9	51	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	65.0	31.0	16.0		江戸		
9	52	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	46.0	24.0	9.0	【正面】西阿弥	江戸		
9	53	箱仏 (二尊地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	36.0	26.0	9.0		江戸		
9	54	箱仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	33.0	19.0	9.0		室町		
9	55	箱仏 (二尊地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	32.0	29.0	7.5		江戸		
9	56	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	地藏堂内	安山岩	37.0	22.0	11.0		江戸		
9	57	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	31.0	18.0	7.0		江戸		
9	58	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	35.0	26.0	12.0		江戸		
9	59	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	39.0	33.0	12.0		室町		
9	60	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	39.0	24.5	9.0		江戸		
9	61	箱仏 (二尊地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	38.0	32.0	12.0		室町		
9	62	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	38.0	26.0	10.5		室町		
9	63	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	35.0	21.0	9.0		室町		
9	64	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	35.0	21.0	9.0		室町		
9	65	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	27.0	24.0	9.0		江戸		
9	66	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	39.5	26.0	9.0		江戸		
9	67	箱仏(地藏菩薩立像)	地藏堂内	花崗岩	40.0	30.0	9.0		室町		
10		灯籠	境内	花崗岩	248.0	98.0	111.5	【竿部正面】常夜燈／福岡市千代町／小林市太郎 【竿部裏面】昭和十年七月	昭和10	1935	
11		灯籠	境内	花崗岩	214.0	96.0	87.0	【竿部正面】常夜燈／京都／中村綱 【竿部裏面】昭和九年一月／為／真全上人	昭和9	1934	
12		灯籠	境内	花崗岩	243.0	90.0	95.0	【竿部正面】常夜燈／下村氏 【竿部裏面】延享五戊辰年／五月吉日	延享5	1748	
13	1	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	境内	花崗岩	32.0	17.0	12.0		江戸		
13	2	台座	境内	花崗岩	15.0	37.0	21.0		室町		
14		舟形石仏 (地藏菩薩立像)	境内	花崗岩	57.0	37.0	29.0		江戸		
15	1	箱仏(地藏菩薩立像)	境内	花崗岩	33.0	21.5	8.5		江戸		
15	2	台座	境内	花崗岩	6.0	22.3	16.0		室町		

表4 境内石造物一覧(4)

資料番号	名称	所在	材質	法量			銘文	時期		備考
				高さ	幅	厚さ (奥行)		区分(和暦)	西暦	
16	方角柱碑(標石)	境内	花崗岩	282.0	66.5	67.0	【正面】史蹟元興寺塔址 【右側面】史蹟名勝天然記念物保存法依り 昭和七年四月文部大臣指定 【左側面】昭和十五年五月建設	昭和15	1940	
17	礎石	境内	花崗岩	29.0	202.0	153.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	21.0	89.0	164.0		奈良		
17	礎石	境内	閃緑岩	36.0	159.0	156.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	36.0	214.0	158.0		奈良		
17	礎石	境内	閃緑岩	26.0	146.0	170.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	20.0	103.0	180.0		奈良		
17	礎石	境内	閃緑岩	35.0	190.0	128.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	26.0	180.0	117.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	27.0	182.0	125.0		奈良		
17	礎石	境内	閃緑岩	20.5	130.0	138.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	14.5	164.0	125.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	13.0	117.0	126.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	11.0	107.0	103.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	16.5	119.5	172.0		奈良		
17	礎石	境内	閃緑岩	10.5	131.0	124.0		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	16.0	112.0	119.5		奈良		
17	礎石	境内	花崗岩	32.0	190.0	188.0		奈良		
18	方形碑(標石)	境内	花崗岩	111.0	62.0	36.0	【正面】[ ]子/元興寺 【右側面】芝之新屋町口師弥兵衛	江戸		
19	手水鉢	境内	花崗岩	41.0	62.0	39.0	【正面】十九所社	江戸		
20	灯籠	境内	花崗岩	189.0	76.0	76.0	【竿部正面】常夜燈/大阪/光田勘作 【竿部裏面】昭和九年八月 祈願家内安全	昭和9	1934	
21	灯籠	境内	花崗岩	174.0	70.0	61.0	【竿部正面】照闇/奈良/橋口重子	近代		
22	方角柱碑(標石)	境内	花崗岩	52.0	18.5	18.0	【正面】史蹟境界 【左側面】文部省	近代		
23	水受	境内	花崗岩	90.0	46.0	46.0		江戸		
24	1 灯籠	境内	花崗岩	285.0	230.0	196.0	【竿部裏面】[ ]			
24	2 前机	境内	花崗岩	95.0	93.0	48.0	【裏面】奉納/願人/飯田雅治/山城木津	近代		
25	井戸枠	境内	花崗岩	53.0	117.5	117.0		江戸		
26	仏足石	境内	花崗岩	39.0	62.2	62.3	【正面】元興寺大鏡/刊行記念/昭和九年六月/東京 大塚氏	昭和9	1934	
27	灯籠	境内	花崗岩	250.0	86.0	88.0	【竿部正面】福岡市千代町/小林なつ系 【竿部裏面】昭和十年七月	昭和10	1935	
28	丸彫石像(狐)	境内	花崗岩	212.0	68.5	84.0	【基礎正面】献 【基礎右側面】小倉在道原/吉武氏/延吉氏/昭和十年十一月 【基礎裏面】奈良石匠/信正作	昭和10	1935	
29	宝篋印塔	境内	花崗岩	22.0	26.5	26.5		室町		
30	宝篋印塔	境内	花崗岩	27.0	26.0	24.0		室町		
31	1 礎石	境内	花崗岩	27.0	51.0	54.0				下に凝灰岩礎石
31	2 礎石	境内	花崗岩	30.0	57.0	55.0				下に凝灰岩礎石
32	層塔	境内	花崗岩	227.0	49.0	49.0				
33	1 礎石	本堂周辺	安山岩	21.0	91.8	81.3				
33	2 礎石	本堂周辺	安山岩	17.0	74.0	81.3				
33	3 礎石	本堂周辺	花崗岩	15.0	105.0	82.8				
33	4 礎石	本堂周辺	花崗岩	19.0	104.4	84.3				
33	5 礎石	本堂周辺	花崗岩	14.0	97.1	91.5				
33	6 礎石	本堂周辺	凝灰岩	26.0	68.8	70.3				
33	7 礎石	本堂周辺	花崗岩	13.0	75.3	63.8				
33	8 礎石	本堂周辺	安山岩	22.0	98.2	61.3				
33	9 礎石	本堂周辺	凝灰岩	25.5	70.3	70.0				
33	10 礎石	本堂周辺	安山岩	21.0	105.0	65.7				
34	手水鉢	本堂周辺	花崗岩	25.5	52.0	52.0		江戸		
35	相輪	本堂周辺	花崗岩	29.0	15.0	15.0		室町		
36	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	本堂周辺	花崗岩	74.2	34.0	18.0	【正面】光[ ]/四月[ ]	江戸		
37	箱仏(地藏菩薩立像)	本堂周辺	花崗岩	64.0	33.0	13.0		室町		
38	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	本堂周辺	花崗岩	69.0	31.0	12.0	【正面】道音/文久九年正月十七日	文化9	1813	
39	箱仏(地藏菩薩立像)	本堂周辺	砂岩	21.0	16.0	7.0		江戸		
40	1 花立	本堂周辺	花崗岩	39.0	18.5	18.5	【正面】卍/[ ]	江戸		
40	2 花立	本堂周辺	花崗岩	39.5	25.0	25.0	【正面】卍	江戸		
40	3 花立	本堂周辺	花崗岩	43.0	18.5	18.5	【正面】卍/[ ]	江戸		
41	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	18.5	28.0	20.0		室町		

表5 境内石造物一覧(5)

資料番号	名称	所在	材質	法量			銘文	時期		備考	
				高さ	幅	厚さ (奥行)		区分(和暦)	西暦		
42	丸彫石仏 (弘法大師坐像)	本堂周辺	砂岩 (像部・ 基礎)、 花崗岩(祠)、 凝灰岩 (台座)	103.0	66.0	63.0	【基礎正面】昭和[ ]/弘[ ]/総[ ]/ 金[ ]/石匠[ ]	昭和		台座は古代の礎石	
43	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	36.0	31.5	30.5		室町			
44	花立	本堂周辺	花崗岩	37.0	18.5	18.5		江戸			
45	1	灯笼	本堂周辺	花崗岩	210.5	140.3	212.0	【竿部正面】常夜燈 米田氏 【竿部裏面】昭和八年十一月 為釋尼真量	昭和8	1933	
45	2	灯笼	本堂周辺	花崗岩	212.0	136.0	115.0	【竿部正面】常夜燈 米田氏 【竿部裏面】昭和八年十一月 為釋尼真善	昭和8	1933	
46		前机	本堂周辺	花崗岩	144.0	80.5	47.0	【裏面】大阪 伊庭熊太郎/家運/長久/ 昭和八年中秋日	昭和8	1933	
47	1	浮彫石仏 (不動明王立像)	本堂周辺	花崗岩	265.0	135.5	91.8	【基礎左側面】筑前博多/金屋小路/石匠 /国廣/石山人 【像部裏面】西川多一郎 願満足	近代		
47	2	1	灯笼	本堂周辺	花崗岩	107.4	35.6	31.8	【竿部正面】照/大阪/楠野氏	近代	
47	2	2	灯笼	本堂周辺	花崗岩	103.6	37.7	31.8	【竿部正面】明/大阪/山本氏	近代	
47	2	3	灯笼	本堂周辺	花崗岩	105.4	38.6	31.8	【竿部正面】照 山本氏	近代	
47	2	4	灯笼	本堂周辺	花崗岩	107.2	37.3	31.5	【竿部正面】明/大阪/山本氏	近代	
47	3	1	花瓶	本堂周辺	花崗岩	45.4	27.5	27.1		近代	
47	3	2	花瓶	本堂周辺	花崗岩	45.0	26.0	26.0		近代	
47	4	線香立	本堂周辺	花崗岩	23.0	34.0	34.0		近代		
47	5	1	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(筑前) /延吉初恵	近代	
47	5	2	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(筑前) /高橋幸市	近代	
47	5	3	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(筑前) /高橋三和	近代	
47	5	4	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(大阪) /岸本卯三郎	近代	
47	5	5	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(大阪) /八木恵心	近代	
47	5	6	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(大阪) /岸本政一	近代	
47	5	7	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱裏面】田中為三郎/昭和九年正月了	近代	
47	5	8	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(伏見) /西村有央	近代	
47	5	9	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(京都) /横溝モヨ	近代	
47	5	10	玉垣	本堂周辺	花崗岩				【親柱正面】(京都) /清水茂次郎	近代	
47	6		基壇	本堂周辺	花崗岩	73.0	638.0	640.5		近代	
47	7		護摩炉	本堂周辺	花崗岩	11.0	40.5	46.0		近代	
47	8		石階	本堂周辺	花崗岩	50.0	459.0	459.0		近代	
47	9	1	方角柱碑	本堂周辺	花崗岩	131.8	24.6	19.0		近代	
47	9	2	方角柱碑	本堂周辺	花崗岩	132.0	24.0	19.0		近代	
48		五輪塔	本堂周辺	花崗岩	128.0	44.0	42.5		室町		
49		五輪塔	本堂周辺	花崗岩	77.0	46.0	35.0		室町		
50		五輪塔	本堂周辺	花崗岩、 凝灰岩 (基礎)	78.0	33.0	35.0		室町		
51		五輪塔	本堂周辺	花崗岩	89.0	38.0	33.0		室町		
52		石碑(六字名号碑)	本堂周辺	花崗岩	41.0	25.0	12.5	【正面】□無阿弥陀佛	江戸		
53		舟形五輪塔	本堂周辺	安山岩	48.5	27.0	11.0	【正面】(梵字キョカラバア) /清淳	江戸		
54		五輪塔	本堂周辺	花崗岩	95.0	51.0	47.0	顕宝真代	室町		
55		五輪塔	本堂周辺	花崗岩	96.0	50.0	45.5		室町	基礎は宝塔基礎	
56		一石五輪塔	本堂周辺	花崗岩	48.0	24.5	25.0	【地輪正面】美秀	室町		
57		五輪塔	本堂周辺	花崗岩	106.0	48.0	48.0		室町		
58		石碑(六字名号碑)	本堂周辺	花崗岩	81.0	29.0	18.0	【正面】[ ] 弥陀佛/[ ] 弥陀佛	江戸		
59		舟形石仏 (地藏菩薩立像)	本堂周辺	花崗岩	49.0	23.0	14.0	【正面】二即童子	江戸		
60		墓碑	本堂周辺	花崗岩	49.0	25.0	15.0	【正面】永□三[ ] / □息坊法印/六 月廿六日	江戸		
61		石碑(六字名号碑)	本堂周辺	花崗岩	49.0	23.0	12.0	【正面】[ ] 四月廿五日/南無阿弥陀佛/ □□禪定尼	江戸		
62		櫛形墓碑	本堂周辺	花崗岩	140.0	75.0	79.0	【正面】(梵字キリク) /清譽誠心禪定 門/慈譽妙貞禪定尼/浄譽覚道禪定門/ 普譽浄照禪定尼/菩提 【裏面】普 明治廿九年七月十七日/浄 大正十年八月八日/慈 明治四十四年六 月廿五日/清 明治三十一年七月六日	大正10	1921	
63		五輪塔	本堂周辺	砂岩	71.0	25.0	25.0		室町		



表6 境内石造物一覧(6)

資料番号	名称	所在	材質	法量			銘文	時期		備考
				高さ	幅	厚さ (奥行)		区分(和暦)	西暦	
64	櫛形墓碑	本堂周辺	花崗岩	113.0	56.0	58.0	【正面】(浮彫地藏菩薩坐像)本玄水子／ 為真水子／皎月水子 【裏面】本 明治廿八年二月廿四日／為 大正二年九月十三日／皎 明治廿三年七 月十五日	大正2	1913	
65	舟形五輪塔	本堂周辺	安山岩	47.0	30.5	15.5	【正面】慶長九甲辰／行西禪門／七月二日	慶長9	1604	
66	自然石墓碑	本堂周辺	花崗岩	55.0	51.0	19.0	【正面】(梵字キリーク)／清音／妙音	江戸		
67	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	26.0	34.0	34.0	【水輪四面】(梵字)	室町		
68	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	20.0	26.0	26.0		室町		
69	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	24.0	22.0	22.0		室町		
70	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	32.0	26.0	26.0		室町		
71	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	12.0	23.0	23.0		室町		
72	墓碑	本堂周辺	花崗岩	28.0	28.0	14.5	【正面】(梵字ア)一蘭家墓	江戸		
73	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	24.0	18.0	18.0		室町		
74	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	23.0	17.0	17.0	【地輪四面】(梵字)	室町		
75	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	41.0	35.0	36.0		室町		
76	花立	本堂周辺	花崗岩	60.0	20.0	20.0	【正面】卍／榮□／□豊／半七	江戸		
77	舟形石仏 (地藏菩薩立像)	本堂周辺	花崗岩	36.0	28.0	25.0	【正面】祐[ ]	江戸		
78	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	13.0	20.0	19.5		室町		
79	墓碑	本堂周辺	花崗岩	23.0	31.0	15.0	【正面】天文十年辛丑／常蓮／六月廿五日	天文10	1542	
80	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	20.0	26.5	26.0		室町		
81	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	32.0	52.0	52.5		室町		
82	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	16.0	26.0	25.5		室町		
83 1	尖頭状碑	境内	花崗岩	17.0	25.0	24.5		近代		
83 2	尖頭状碑	境内	花崗岩	8.0	24.5	24.0		近代		
83 3	尖頭状碑	境内	花崗岩	12.0	24.5	25.0		近代		
83 4	尖頭状碑	境内	花崗岩	19.0	24.5	25.5		近代		
84	礎石	境内	花崗岩	39.0	87.0	66.0				
85	礎石	境内	安山岩	30.0	111.0	87.0				
86	礎石	境内	安山岩	23.0	159.0	78.0		奈良		
87	礎石	本堂周辺	凝灰岩	13.0	75.5	72.0		奈良		
88	五輪塔	本堂周辺	花崗岩	18.5	25.0	25.5		室町		
89	礎石	本堂周辺	花崗岩	22.0	39.0	27.0				
90 1	礎石	本堂周辺	花崗岩							
90 2	礎石	本堂周辺	花崗岩							
90 3	礎石	本堂周辺	花崗岩							
90 4	礎石	本堂周辺	花崗岩							
91	五輪塔	地藏堂周辺	花崗岩	13.5	21.3	13.0		室町		
92	不明	地藏堂周辺	花崗岩	15.7	14.1	19.3				
93	歌碑	参道脇	閃緑岩	69.5	117.8	67.8	古郷の明日香は／あれどおおによし／平 城の飛鳥を／みらくしよしも／元興寺の 里をよめる 万葉の歌／圭立之	現代		
94	矢穴石	庫裏周辺	花崗岩	40.3	76.1	69.8		江戸		
95	手水鉢	庫裏周辺	花崗岩	20.8	44.2	43.7		江戸		
96	石臼	庫裏周辺	花崗岩	12.9	23.8	24.0		江戸		
97 1	台座	鎮守横	花崗岩	11.9	38.0	(32.8)		室町		
97 2	五輪塔	鎮守横	花崗岩	18.8	25.7	22.8		室町		
97 3	五輪塔	鎮守横	花崗岩	13.0	25.8	24.7		室町		
98	五輪塔	鎮守横	花崗岩	9.5	20.9			室町		
99	基壇石	鎮守横	花崗岩	16.0	70.5	77.0				
100	燈籠(中台)	鎮守横	花崗岩	10.3	32.2	32.0				
101	礎石	鐘楼	凝灰岩	11.5	72.7	72.5		古代		
102	礎石	鐘楼	凝灰岩	7.3	75.5	72.0		古代		
103	礎石	鐘楼	花崗岩	11.0	53.2	69.8		古代		
104	礎石	鐘楼	凝灰岩	7.5	66.0	66.3		古代		
105	切石	鐘楼	凝灰岩	15.5	31.7	57.0		古代		
106	台座	本堂周辺	花崗岩	13.2	37.4	35.2		室町		
107	石橋	本堂周辺	花崗岩	10.5	185.4	45.7		江戸		
108 1	板石	本堂周辺	凝灰岩	19.5	45.9	32.5		古代?		
108 2	板石	本堂周辺	凝灰岩	15.5	26.0	53.0		古代?		
108 3	板石	本堂周辺	凝灰岩	19.0	38.5	24.7		古代?		

## 第2章 本堂周辺の礎石について

### (1) 概要

現本堂周辺には20個以上の礎石及び切石片が散在する。これらの礎石について『元興寺記録』昭和5年（1930）8月30日条には以下のように記す。

境内東北隅ニテ吉村長二郎氏ニ貸地九坪五合内ニ庭石トシテ伽藍石及金坊石取合せ、十個ハ新ニ建設スル鐘堂ノ柱石トシテ必要ナレバ此石ノ返還方ヲ申入レ置キタルニ氏ハ早速人夫ヲ率テ還付セラレタルニ付当方モ手数ヲ謝スベク人夫四名ヲ出シ受取ルト全時ニ鐘堂ノ柱石トシテ据ヘ付ケ残余ノ石ハ一時本堂ノ裏手ニ収容ス

この記述から、昭和5年以前は礎石が東北隅の吉村氏宅の庭石であったこと、その土地はもともと華嚴宗元興寺境内であったことがわかる。吉村氏が寺側の礎石返還要求に対し、自ら人夫を出して進んで返還に応じていることから、借地契約を結ぶ以前から礎石の件は周知であり、それが寺のものであるという認識が定着していた可能性が高い。また、この際返還されたのは10個であるが、現在境内にはこれを上回る20個以上の礎石・板石がある。礎石の大半は被熱しており、安政6年（1859）の火災に際して被災したものであることが想定できる。以上の点からこれらの礎石は近世以前から華嚴宗元興寺境内に所在したものであると考えられる。

### (2) 礎石の石材と形状

本堂周辺の礎石は流紋岩質火山礫凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、花崗岩、輝石安山岩の4種類の石材で構成される（巻頭図版4～6）。流紋岩質火山礫凝灰岩は白色の基質と軽石を含み、二上山周辺で採取される凝灰岩と思われる。流紋岩質溶結凝灰岩は長石、石英、角閃石を含み気泡が多い。花崗岩は結晶構造の大きいものや片麻構造をもつものなど種類に富む。輝石安山岩は三笠山安山岩とされる岩種で、いわゆるカナンボ石とよばれるものである。

これらの石材の帯磁率を図化したのが図2である。計測は携帯型帯磁率計（田中地質コンサルタント社製 WSL-C 帯磁率計）を使用し、各石材6～8点を測定し、最大値と最小値を除いた数字を平均化してプロットした。これを見ると火山礫凝灰岩と溶結凝灰岩は比較的明確に分かれることが看取できる。なお輝石安山岩については数値が二桁高いためプロットしていない。以下、石材種類ごとに礎石の形状を解説する。

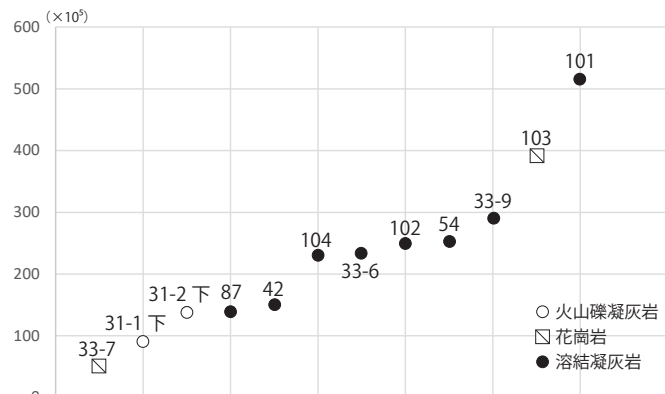


図2 礎石帯磁率分布図



### A. 流紋岩質火山礫凝灰岩製礎石

No.31-1 下・31-2 下はいずれも上面に低い方形の柱座をもつものである。柱座は一辺 45～50cm、高さ 3～4cm を測る。被熱痕は確認できない。

### B. 流紋岩質溶結凝灰岩製礎石

流紋岩質溶結凝灰岩製礎石はすべて切石を利用している。いずれも一辺 70～75cm 前後の正方形のもので、下面の一部が観察できる No.33-6・33-9 からは 25～26cm 程度の厚さが推定できる。

No.33-6 は 68.8×70.3cm、厚さ 26cm を測り、直径 67.2cm、高さ 17.8cm の円形柱座を彫出する。柱座の左右には地覆が取り付く張り出しを有する。柱座上面には直径 13.0cm、深さ 8.3cm を測る柄穴を持つ。一部被熱痕が確認できる。

No.33-9 は二つに折損しており正確な規模は不明だが、一辺 70.3cm、厚さ 25.5cm を測るものと思われる。直径 67.4cm、高さ 19.8cm の円形柱座を彫出する。柱座の左右には地覆が取り付く張り出しを有する。柱座上面には直径 19.0cm、深さ 9.3cm を測る柄穴を持つ。全面被熱痕が確認できる。

No.42 は二辺が二次加工により欠損しており本来の形状が不明である。わずかに残存する部分からは一辺 68.3cm が復元できる。上部に弘法大師像が載るため柄穴の有無等は不明である。被熱痕は確認できない。

No.54 は五輪塔の台座として利用されている。著しく破損しており本来の規模等は不明である。被熱痕は確認できない。

No.87 は 72.0×75.5cm を測る。縁辺部が二次加工により改変されているが、円形柱座は当初より彫出していなかったと思われる。上面には柄穴があるが、コンクリートによって充填されており、規模等は不明である。地衣類の付着が著しく、被熱痕等は確認できない。

No.101 は 72.5×72.7cm を測り、直径 66.0cm、高さ 12.5cm の円形柱座を彫出する。柱座の高さが他に比して低いことから、柱座上面を削っている可能性がある。鐘樓の柱が柱座上面に乗るため、柄穴の有無については不明である。全面被熱痕が確認できる。

No.102 は 72.0×75.5cm を測り、直径 68.0cm、高さ 11cm の円形柱座を彫出する。柱座の高さが他に比して低いことから、柱座上面を削っている可能性がある。鐘樓の柱が柱座上面に乗るため、柄穴の有無については不明である。全面被熱痕が確認できる。

No.104 は直径 66.3cm を測る柱座を造り出す。下半がコンクリートに埋め込まれるため詳細は不明である。鐘樓の柱が柱座上面に乗るため、柄穴の有無については不明である。全面被熱痕が確認できる。

No.105 は鐘付用の足場石として利用されている。礎石を再加工した切石である。被熱の痕跡は確認できない。

### C. 花崗岩製礎石

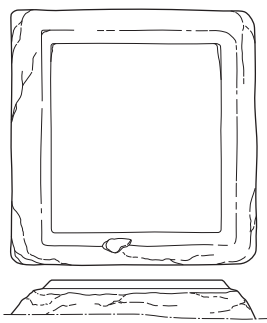
花崗岩製礎石はいずれも不整形な石材を用いている。上面の柄穴は流紋岩質溶結凝灰岩製に比して浅い。

No.33-3 は長軸 105cm、短軸 82.8cm を測る不整形な楕円形を呈し、上面は平坦に加工して直径 12.5cm、深さ 4.4cm の柄穴を穿つ。被熱痕はみられない。

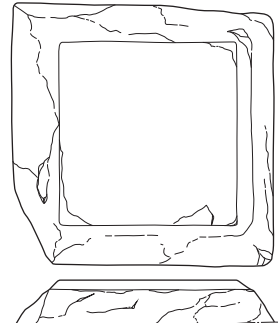
No.33-4 は長軸 104.4cm、短軸 84.3cm を測る不整形な三角形を呈し、上面は平坦に加工して直径 13.8cm、深さ 5.7cm の柄穴を穿つ。全面に被熱痕が確認できる。

No.103 は長軸 69.8cm、短軸 53.2cm を測る不整形な楕円形を呈し、上面も未加工で平坦さを欠く。上面に鐘樓柱が乗るため柄穴の有無等は不明である。全面に被熱痕が確認できる。

【A. 流紋岩質火山礫凝灰岩】



No.31-1 下

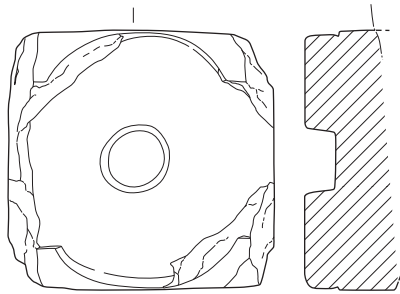


No.31-2 下

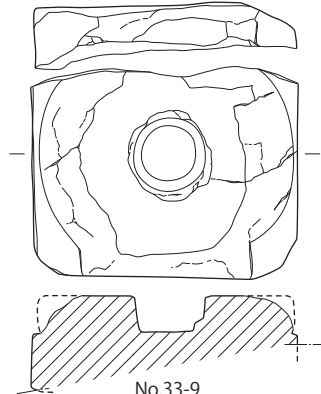


- 石造物・柱
- コンクリート

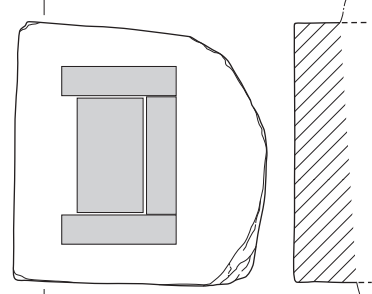
【B. 流紋岩質溶結凝灰岩（榛原石）】



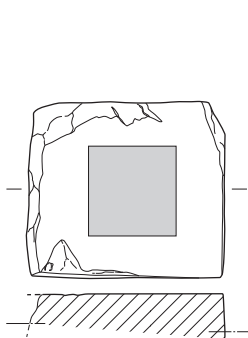
No.33-6



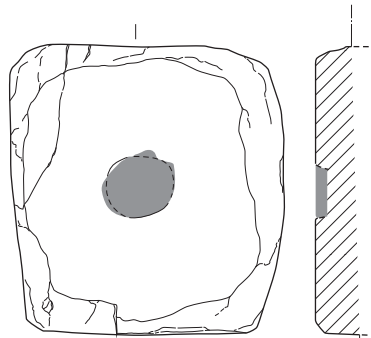
No.33-9



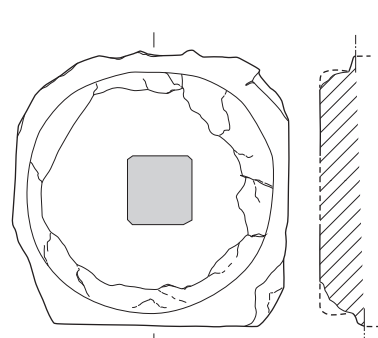
No.42



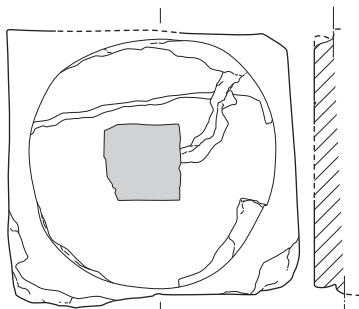
No.54



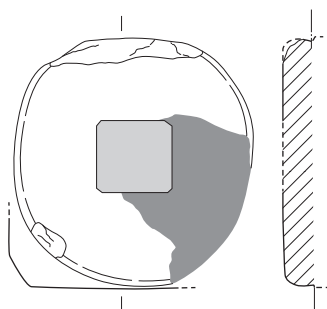
No.87



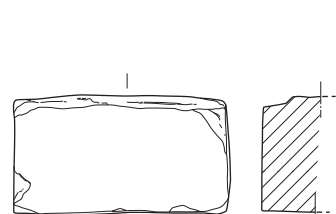
No.101



No.102



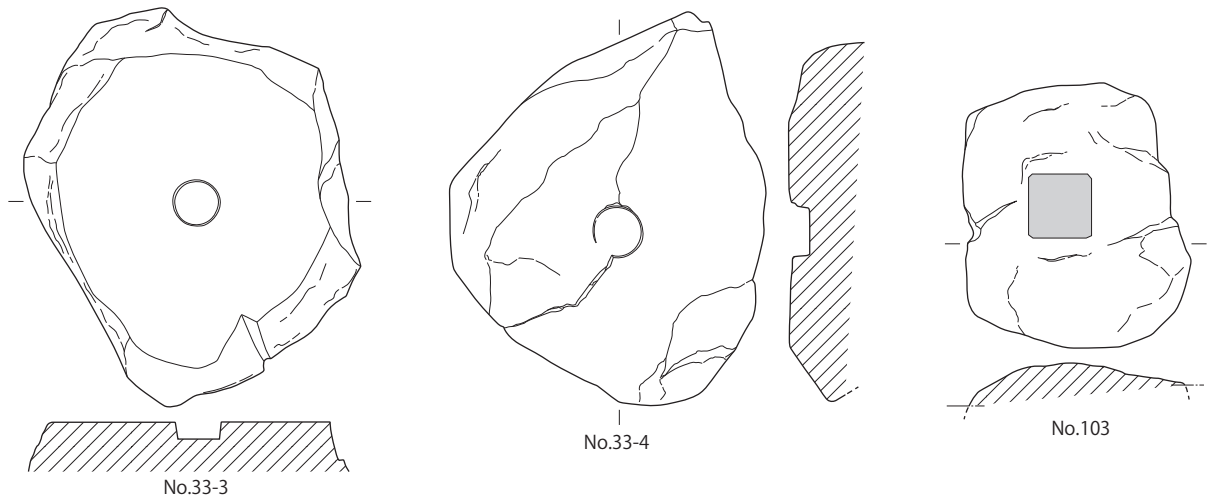
No.104



No.105

図3 境内礎石実測図 (1) (S=1/20)

【C. 花崗岩】



【D. 輝石安山岩 (カナンボ石)】

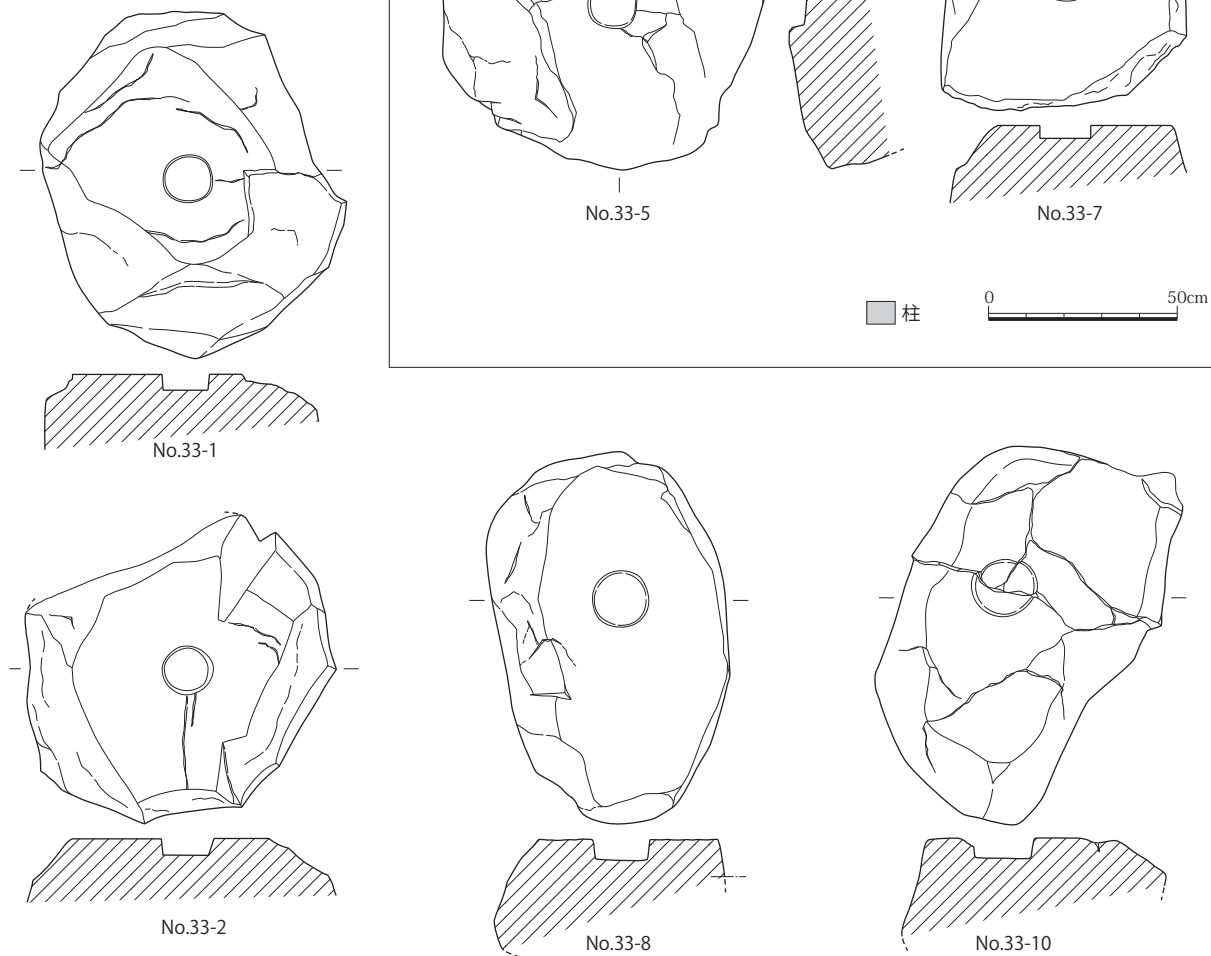


図4 境内礎石実測図(2) (S=1/20)

No.33-5 は長軸 97.1cm、短軸 91.5cm を測る不整形な楕円形を呈し、上面も未加工で平坦さを欠く。上面に直径 14.3cm、深さ 4.8cm の柄穴を穿つ。全面に被熱痕が確認できる。

No.33-7 は長軸 75.3cm、短軸 63.8cm を測る不整形な楕円形を呈し、上面は平坦に加工して直径 8.3cm、深さ 3.4cm の柄穴を穿つ。全面に被熱痕が確認できる。

#### D. 輝石安山岩製礎石

輝石安山岩製礎石も不整形な石材を用いている。柄の形状は花崗岩製に類似する。

No.33-1 は長軸 91.8cm、短軸 81.3cm を測る不整形な楕円形を呈し、上面は平坦に加工して直径 13.2cm、深さ 4.3cm の柄穴を穿つ。全面に被熱痕が確認できる。

No.33-2 は長軸 81.3cm を測る不整形な楕円形を呈し、上面は平坦に加工して直径 13.8cm、深さ 4.4cm の柄穴を穿つ。全面に被熱痕が確認できる。

No.33-8 は長軸 98.2cm、短軸 61.3cm を測る不整形な三角形を呈し、上面は平坦に加工して直径 15.0cm、深さ 5.3cm の柄穴を穿つ。全面に被熱痕が確認できる。

No.33-10 は長軸 105.0cm 以上、短軸 65.7cm を測る不整形な楕円形を呈し、上面は平坦に加工して直径 17.3cm、深さ 5.3cm の柄穴を穿つ。全面に被熱痕が確認できる。

### (3) 火山礫凝灰岩製、流紋岩質溶結凝灰岩製礎石について

華嚴宗元興寺境内に所在する礎石の最大の特徴は、流紋岩質溶結凝灰岩製のものが多数を占めることである。この石材は弱溶結で内部に石英、雲母などの結晶が目立つ石材で、色調は灰色～暗褐色を呈する。部分によっては火山豆石も観察できる。奈良盆地周辺でこのような石材が見られるのは室生を中心とした地域であり、大峰・大台を噴出起源とする室生火砕流堆積物が筆頭候補として挙げられる。この石材は考古学では主に「榛原石」という呼称で取り扱われているが、三重県側では大洞石など採取地の呼称で呼ばれている。室生火砕流堆積物は、大台ヶ原周辺にかつて存在した大台カルデラを噴出源とするもので、同一起源と考えられる火砕流堆積物は奈良市東部の石仏凝灰岩層や、大阪東部の玉手山凝灰岩層にまで及んでいる。その噴出総量は 100km<sup>3</sup>以上と推定されており、まさに supervolcano に起因する石材である（佐藤ほか 2012）。これらの噴出物は噴出源に近いほど強溶結化しており、逆に噴出源から遠い石仏凝灰岩層や玉手凝灰岩層では弱溶結の白色凝灰岩となっている。

華嚴宗元興寺の溶結凝灰岩製礎石の石材は黒曜石レンズが明確でなく、溶結度は高くない。また、一部に火山豆石も観察できるなど、凝灰岩としての特質をよく示している。これに最もよく似た岩相を示すのが宇陀市室生区向瀨飯降磨崖仏周辺で採取した石材である（巻頭図版 6）。結晶構造や溶結状況、多孔質の外観など共通性が多く、境内の礎石は室生地帯で産出した石材である可能性が高い。以下ではこの前提に立って、考古学的に通称とされている「榛原石」という名称を使用することとする。

### (4) 榛原石製礎石の類例 興福寺食堂の礎石

華嚴宗元興寺に残される火山礫凝灰岩製礎石、榛原石製礎石はいずれも切石を用いており、中近世の礎石とは考えられない。奥田尚の丹念な石材調査では盆地北部における榛原石の利用例は極めてまれであり（考古石材の研究会 2011）、元興寺近隣で榛原石製礎石を利用する遺跡も極めて少ない。その中で、もっとも類似するのは興福寺食堂の礎石である。

興福寺では 1959 年の発掘調査により食堂基壇が全面調査され、中世以降に大きく改変を受けながらも 27 個の礎石が旧位置を保って発見されている（図 5）（奈良国立文化財研究所 1960）。礎石は榛原



石製で、1辺90cm前後の正方形をつくり、その上面いっばいに円形造り出しを彫出する。柄や柄穴は見られない。写真で判読する限り、華嚴宗元興寺の流紋岩質溶結凝灰岩製礎石に最も類似する礎石はこの興福寺食堂のもののみである。ただし、柄穴が無いことなど、華嚴宗元興寺の礎石とは異なる部分があり、華嚴宗元興寺のものが興福寺からもたらされたものであるとは言い切れない。



図5 興福寺食堂礎石出土状況

(奈良国立文化財研究所 1960 より)

#### (5) 榛原石の利用と飛鳥寺の礎石

さて、いわゆる「榛原石」の利用については、それが磚積石室墳とよばれる宇陀地域の特殊な古墳と、飛鳥地域の限られた古代寺院で使用されていることから注目を集めてきた。榛原石の使用事例を広く集めた菅谷文則は石室における磚積石室墳の始まりを榛原市丹切三十三号墳とし、その年代を7世紀前半に位置付けた。そして量的使用の終焉を7世紀第3四半期の大阪府河南町塚廻古墳に推定する。そのうえで榛原石の利用は古墳に先行して590年造営開始の飛鳥寺が初現であること、7世紀後半以降の利用はいずれも限定的であることなどを指摘して、その石材産出・流通に蘇我氏の強い関与を指摘した(菅谷1985)。近年では長谷川理恵子も新出資料を加えつつ同様の分析を行い、やはり榛原石の本格利用が7世紀中葉に終了し、かわって天理砂岩など他の石材が進出することを指摘、その背景に蘇我本宗家の滅亡を考える(長谷川2017)。このように榛原石は飛鳥寺造営を契機に利用が始まり、7世紀中葉までの短期間集中的に利用された石材であることが判明している。このような榛原石の使用状況を考えると、飛鳥寺の後身である元興寺に榛原石製礎石が遺されることは示唆的である。そこで、飛鳥寺の凝灰岩製礎石のありかたを確認しておく。



図6 飛鳥寺回廊礎石出土状況

(奈良国立文化財研究所 1958 より)

『飛鳥寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所 1958、以下報告書)によると榛原石とされるものは緑泥片岩とともに東西金堂の下成基壇縁石、回廊基壇縁石に使用されており、礎石には使用されていない。また、報告書の記述及び写真を見る限り、円形柱座を持つ方形の凝灰岩製礎石は見られない。残念ながら華嚴宗元興寺境内の榛原石製礎石と同じものは飛鳥寺伽藍中枢部では見られない。ただし、中門東側にとりつく回廊の礎石は1辺60～70cmの正方形で上面に方形の低い柱座を有する(図6)。この回廊礎石については、平成13年に明日香村教育委員会が東回廊を検出した際に、奥田尚による石材鑑定が行われ、流紋岩質火山礫凝灰岩であることが判明している(明日香村教育委員会2002)。華嚴

宗元興寺境内の流紋岩質火山礫凝灰岩製礎石（No.31-1 下・31-2 下）はまさにこれと同形態であり、これが飛鳥寺からの搬入品である可能性が指摘できる。このように、飛鳥寺においては確かに榛原石が使用されているが、華嚴宗元興寺と同形態の榛原石製礎石はなく、かわりに流紋岩質火山礫凝灰岩製礎石に同じものが存在した。榛原石の利用が7世紀に集中すること、飛鳥寺から流紋岩質火山礫凝灰岩製礎石が搬入されていることを考えると、現在は類例がないもの<sup>(1)</sup>、榛原石製礎石についても飛鳥寺ないし周辺寺院からの搬入の可能性は高いと思われる。

## (6) 小結

以上、華嚴宗元興寺の本堂周辺に散在する礎石について検討を行った。本堂周辺の礎石にいわゆる榛原石が含まれていることを明らかにし、これが周辺では興福寺食堂に類例がみられること、ただし興福寺食堂のものは周辺寺院も含めて例のない石材選択であることを指摘した。そのうえで華嚴宗元興寺には飛鳥寺回廊から移転したと思われる礎石が使用されていることを明らかにした。

これ以上は推測であるが、榛原石の利用が7世紀中葉以前に集中し、その利用に蘇我氏の関与が濃厚なこと、華嚴宗元興寺に飛鳥寺回廊礎石（火山礫凝灰岩製）が搬入されていることを考えると、華嚴宗元興寺の榛原石製礎石もやはり飛鳥寺および周辺寺院からの移設を考える必要があるだろう。同様に、興福寺食堂についても、廃絶した蘇我氏関連寺院から礎石を移設した可能性はないだろうか。今後、飛鳥地域において円形柱座をもつ榛原石切石礎石のまとまった発見があることを期待したい。

（佐藤）

## 註

(1) 飛鳥寺同様、地覆石などに榛原石を多用する山田寺でも榛原石を礎石に使用した事例は見られない。また、火山礫凝灰岩製礎石も確認できない。

## 《参考・引用文献》

明日香村教育委員会 2002『明日香村発掘調査概報』平成12年度

考古石材の研究会 2011『石造物の石材研究』Ⅲ

佐藤隆春・中条武司・和田穰隆・鈴木桂子 2012「中新世の室生火砕流堆積物」『地質学雑誌』第118巻

菅谷文則 1985「榛原石考—大化前後におけるある石工集団の興廃—」『末永先生米壽記念献呈論文集 末永先生米壽記念会

奈良国立文化財研究所 1958『飛鳥寺発掘調査報告』

奈良国立文化財研究所 1960『興福寺食堂発掘調査報告』

長谷川理恵子 2017「飛鳥時代の大型方墳—蘇我本宗家と榛原石—」『日本書紀研究』32 日本書紀研究会

## 第3章 五重大塔礎石

### (1) 概要

五重大塔は、古代元興寺の南東部に東塔院として区切られた一画の中に置かれた。塔の成立は養老2年(718)の元興寺全体の中では比較的遅く、基壇から出土した神功開宝の存在から天平神護元年(765)以前には遡らない。『堂舎損色検録帳』からは平安時代、『春日大社文書』中の寛元2年(1244)の寄進状からは鎌倉時代、『大乘院寺社雑事記』からは室町時代、『東大寺諸伽藍略録』及び『東大寺年中行事記』からは江戸時代にそれぞれ修理が行われたことがうかがえる。

安政6年(1859)に毘沙門町からの飛火により焼失する。以後、一時的に仮堂が設けられたこともあったが、これも撤去され、現在の礎石が露出した状況となる。往時の五重大塔の姿は江戸時代に作製された「南都元興寺大塔二十分之一図」などの記録が残っている。

昭和2年には、稲森賢次による礎石実測調査が行われ、17基の礎石の配置状況が記録されている(稲森1930)。そのとき行われた心礎周辺の掘削では、後に重要文化財となる基壇埋納品が出土している。この調査では、安政6年の焼失以降、礎石の周囲は保存されて改変がなされていないことが確認された。またこの礎石は元興寺創建以来、当初の形が保たれているであろうことが指摘されている。

その後の元興寺五重大塔に関する研究は、五重大塔礎石が創建時のまま保たれていることを前提として、創建当初を復元する研究がなされてきた(足立1931など)。東塔院周辺の古代元興寺境内では発掘調査が行われるものの、五重大塔及び東塔院に関わる成果に恵まれなかったことから、考古学的な検討はなされず、建築史学からの視点が元興寺五重大塔研究の中心であった。

### (2) 本調査の方法と成果

元興寺五重大塔の図面は、稲森により作図された平面図以降、詳細な図面は作製されていない。稲森作製図を現地で検討を行うと、作成時から配置などは変更がないものの、石の形状の差異が認められた。加えて、稲森作製時には四天柱礎石上に仮堂があったため、これについては実測が十分には行えていない状況であった。また、現地での観察の結果、創建当初のものとしては礎石柱座の形状及び配置関係にも問題があることがわかり、創建当初から移動している可能性が浮上した。こうしたことから、本調査では、写真測量により、現状の正確な平面図を作成し、その上で平面プランの検討を行うこととした。測量に際しては444枚の写真を使用した。図8にその平面図を示した。

次に測量により得られた寸法について述べる。なお、礎石間の距離の場合は柄心間の距離を指す。文中で使用する礎石の番号は図7に示すとおりである。

五重大塔の平面規模は、東西9.83m、南北9.86mでほぼ正方形を呈する。柱間距離は、四天柱に囲まれた中央間が3.44～3.46m、四天柱と側柱との間の脇間が3.18～3.26mで、

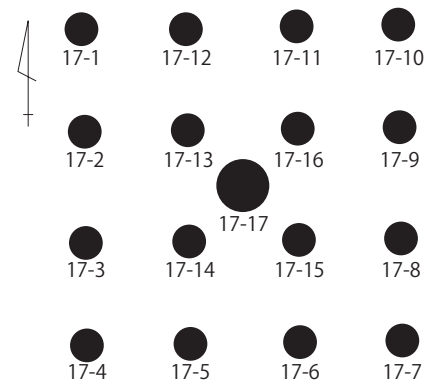


図7 礎石配置図

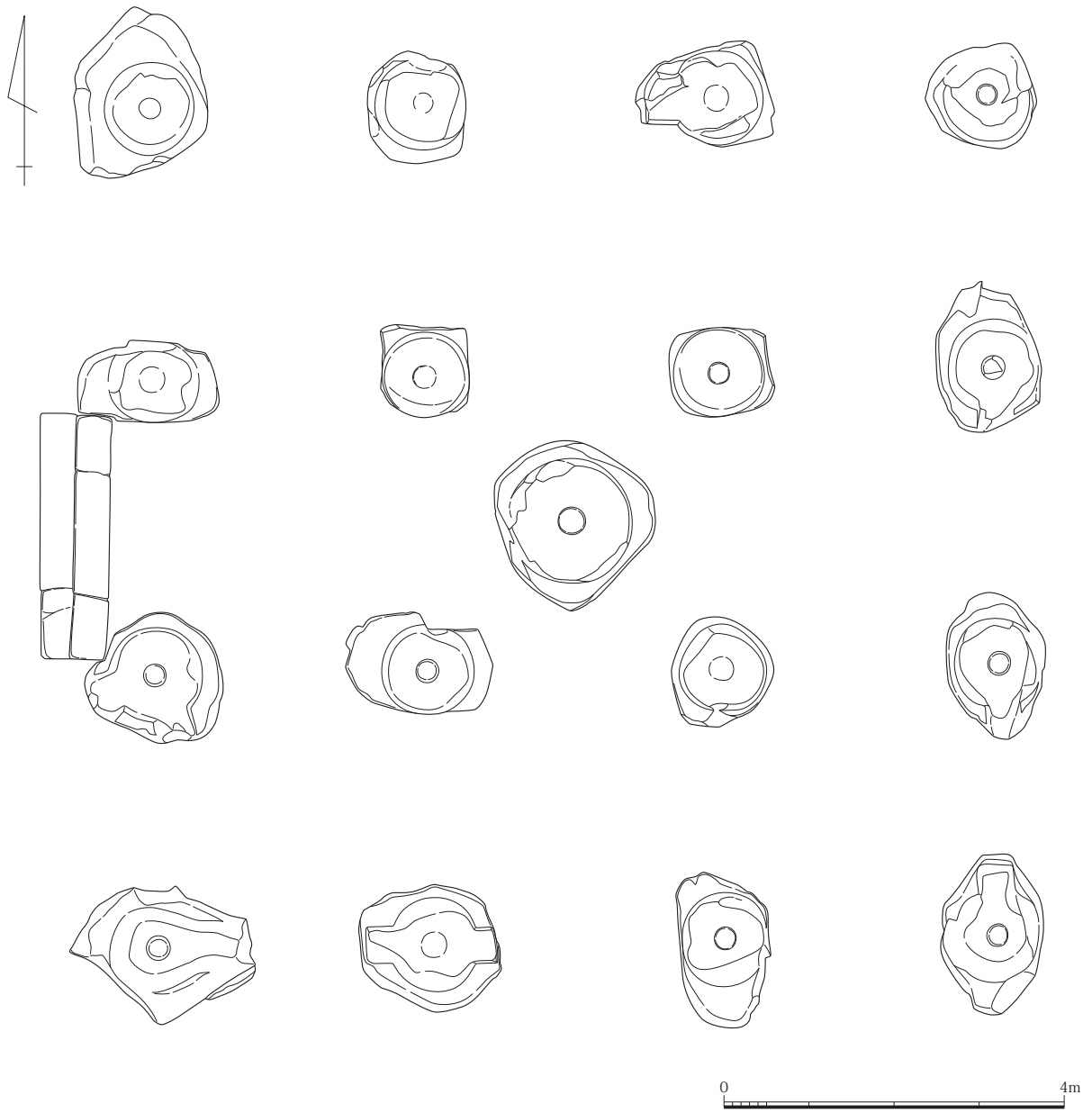


图8 五重大塔礎石实测图 (S=1/80)



中央間がやや広い（図9）。

それぞれの礎石の寸法については、上面は端部の欠けや欠損が認められることから、その下端で計測を行った。柱座径は、心礎が1.47m、心礎以外が1.00～1.11mである。柄径は心礎が0.32m、心礎以外は0.23～0.29mとなり、柱座と同様に心礎が大きくなっている。心礎以外の礎石では、柱座径の平均から5%以内のばらつきであるのに対して、柄径はそのばらつきが10%を超えるものもみられる。

次に礎石の形態的分析を行う。五重大塔の礎石は、柱座の突出する形態から4つに分けられる。ここでは突出のないものをA類、一方方向に突出があるものをB類、二方向に突出があるものをC類とし、C類では二方向の突出が対向するものをC1類、直交するものをC2類に細分する。この分類を各礎石に当てはめると、A類が、No.17-1・2・6・10・12・13・14・15・16・17の10基、B類がNo.17-4・8・9・11の4基、C1類が17-5の1基、C2類がNo.17-3・7の2基ということになる。四天柱にはA類のみが用いられているが、側柱では各類が規則性なく配置されている状況が認められる。

また、本堂周辺の礎石と同様に、五重大塔礎石の帯磁率についても調査を行った。それぞれの礎石について10カ所ずつ測定を行い、そのうち最大と最小の値それぞれ2点を除いた6点の平均値を計算した（表7・図10）。帯磁率からみた場合、五重大塔礎石は3グループに分けられる。まず、100～400台のうちからグループ2のまとまりを除いたグループ1でいずれも花崗岩である。No.17-4・6・8・9・11・12・13・17が該当する。次に同じ花崗岩でも350前後でまとまるグループ2がある。No.17-1・2・14・16が該当する。これらと対照的に高い数値を示すグループ3がNo.17-3・5・7・10・15で、2000～9000の間に分布する。これらは閃緑岩である。

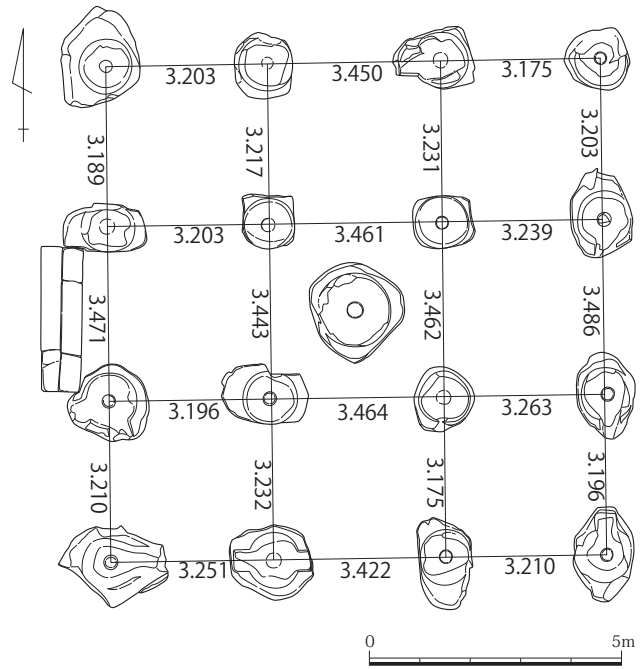


図9 五重大塔礎石柱間寸法 (S=1/150)

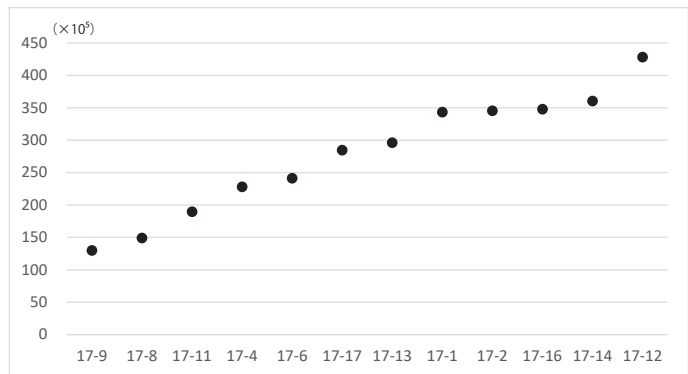
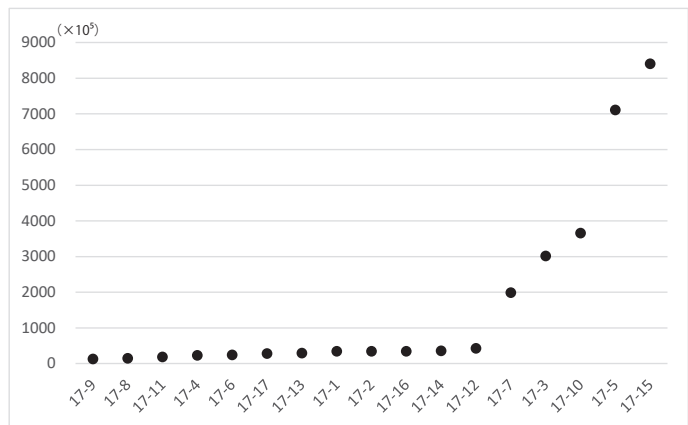


図10 五重大塔礎石帯磁率分布図

上記の形態分類と帯磁率との間には、相関がみられる。B類はグループ1、C1・2類はグループ3に属し、A類はグループ1が多数を占めている。帯磁率の幅が少ないグループ2はいずれもA類が該当している。

最後に、礎石に後世に施されたと考えられる加工痕について述べる。五重大塔には西面する2段の階段が付属している。これは当初からのものかは疑わしいものであるが、これの設置に際して削られたと考えられる掘り込みが、礎石No.17-2・3にみられる。同様の掘り込みはNo.17-14にもみられるが、これに対応する位置にあるNo.17-13には確認できない。これらとは様相がやや異なるが、No.17-15にも柱座から施される掘り込みがみられる。

表7 五重大塔礎石のデータ

礎石番号	柱座径 (mm)	柄径 (mm)	形態分類	帯磁率 ( $\times 10^5$ )	帯磁率分類	石材	備考
17-01	1,051	258	A	343	2	花崗岩	
17-02	1,069	300	A	345	2	花崗岩	
17-03	1,097	266	C2	3015	3	閃緑岩	
17-04	1,009	284	B	228	1	花崗岩	
17-05	1,111	298	C1	7113	3	閃緑岩	
17-06	1,108	254	A	241	1	花崗岩	
17-07	1,037	266	C2	1992	3	閃緑岩	
17-08	1,030	286	B	149	1	花崗岩	
17-09	1,058	279	B	130	1	花崗岩	
17-10	1,012	252	A	3658	3	閃緑岩	
17-11	1,111	288	B	190	1	花崗岩	
17-12	1,072	237	A	428	1	花崗岩	
17-13	1,027	272	A	296	1	花崗岩	
17-14	1,087	277	A	361	2	花崗岩	
17-15	1,034	288	A	8408	3	閃緑岩	
17-16	1,072	289	A	348	2	花崗岩	
17-17	1,471	325	A	285	1	花崗岩	心礎

### (3) 考察

元興寺五重大塔は地上式心礎を持ち、三間四方の平面構造である。礎石の配列は中央間が脇間に比べてやや広い。古代寺院の塔の検討を行った箱崎和久によれば、奈良時代より古い時期には等間とする例が多く、古代においては時期が降るにつれて増えるものの、等間が優勢であることは変わりが無いという。中央官寺で中央間を広くとるものは興福寺が初現とみられ、興福寺の影響の大きさを指摘している(箱崎2012)。興福寺五重塔の創建は天平2年(730)であり、元興寺五重大塔の造営はこれに遅れることになるので、影響を受けている可能性は考えられる。他の官寺でも770年頃に着工された西大寺五重塔、8世紀末から9世紀初頭の築造と考えられる大安寺七重塔などでも、中央間が広がっているものがみられることから、この時期の官寺の塔建築に共通する特徴であるとも言える。元興寺五重大塔は奈良時代後半の官寺の塔建築の潮流の中にあるということが出来る。

設計尺度については、当時使用されていた大尺=356mm、小尺=296mmが想定できるが、平面規模、柱間ともに切りのいい整数とはならず、平面規模で33.2尺となる。そこで33尺の設計とし、これで一辺を除するとおおむね298mmとなり、これが五重大塔造営時の基準となった尺と考えることが出来る。これを柱間にあてると、中央間が11.6尺、脇間が10.7尺となる。柱座径については、小尺で心礎が5尺、心礎以外が3.5尺となる。

中央間と脇間との差分に近い245mmを仮に1尺とすると、中央間が14尺、脇間が13尺、平面規模が40尺四方となり、切りのいい整数値を与えてくれる。この値に近い尺度に中国南朝尺があるが、使用された時期が奈良時代よりも古く、時期的に齟齬がある。

ここで礎石移動の可能性について考えたい。側柱礎石にみられる突出する柱座の方向は、想定される上部構造と対応していない部分が多い。特にNo.17-3は直交する突出部が建物主軸とは大きくずれている。これを創建期以降の修理の際に礎石の移動に伴う改変があったと考えることが可能である。この

ように考えれば、創建期の尺度を保つ礎石柱座と、創建期と異なる尺度による礎石の配置の共存については問題がなくなる。

しかし、礎石にみられる突出部が上部構造に対応しているものとする、現存する礎石の分類別の数量に問題が残る。建物の側柱は、四隅には直交する突出部を持つC2類、それ以外には開口部を持つ辺には一方向の突出部を持つB類、開口部を持たない辺には対抗する二方向の突出部をもつC1類、四天柱及び心礎にはA類が想定できる。B類が4基あるため、開口部は2カ所と考えると、A類が心礎を含めた5基、B類が4基、C1類が4基、C2類が4基を必要とすることになる。つまり、礎石の分類ごとに過不足が発生していることになる。

そこで礎石が他の寺院から持ち込まれた可能性について考えたい。他の寺院での使用を目的に作製された礎石が、おそらく平城京遷都を契機に現在の元興寺に運ばれたと考えれば、元の建物が塔でなければ、五重塔の礎石としたときには過不足が発生することは不思議ではない。また、柱座径と平面規模の尺度の問題についても、他の寺院用に作製された礎石であれば、違いが生じることも想定することが出来る。帯磁率の測定からは礎石の石材は大きく3グループに分けられることから、複数の寺院もしくは建物から持ち込まれた可能性も考えられる。

以上のことから、五重大塔の礎石については、後世に移動された可能性も残しながらも、奈良時代の創建期のものが伝えられていると考えたい。

#### (4) 小結

元興寺五重大塔の礎石について、ここでは奈良時代創建期のものが保たれていると考えたが、平面規模の尺度など、残された課題はまだ多い。本堂周辺の礎石や周辺の発掘調査など、様々なものを複合的に検討していくことで、これらの解明につながっていくものと考えられるので、これからも調査の蓄積がなされていくことが望まれる。

(村田裕介)

#### 《参考・引用文献》

- 稲森賢次 1930『元興寺塔址出土品出土状況報告書』  
足立康 1931「元興寺塔婆の高さ」『東洋美術』第12集  
箱崎和久 2012「古代寺院の塔遺構」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所

## 第4章 啼燈籠

### (1) 由緒

「啼燈籠」と呼ばれる灯籠は、本堂の正面に安置されている。現在の灯籠は、昭和19年（1944）の昭和東南海地震で倒壊した後、平成22年（2010）に修復されたものである。「啼燈籠」をめぐるのは、令和元年度に行った古文書の調査成果から新たな歴史的な動向が明らかにされた（公益財団法人元興寺文化財研究所2020）。ここでは、その成果を援用しつつ、改めて動向を概観する。

「啼燈籠」という名称は、延享年間（1744～1748）に京都の下村某が元興寺から京都に持ち帰ったが、毎夜南都を向いて「帰りたい」となくことから気味悪くなって再び元興寺に返した、という伝承に由来する（高田1936、上野1959）。新たに確認された史料の中には、「代りの灯籠を奉納して古灯籠を申請ひて自宅に運ぶ」【資料番号：庫裡16】とあることから<sup>(1)</sup>、下村某が関与した灯籠は二基存在することになる。実際、下村某が寄進した灯籠は五重大塔基壇前にあり、竿の正面に中節を挟んで「常夜燈、下村氏」、背面の中節より上に「延享五戊辰年／五月吉日」の銘文が認められる。『大和名所図会』（寛政3年）にも本堂前と五重塔付近に二基の灯籠が描かれている。どちらが「啼燈籠」なのかは不明であるものの、境内には二基の灯籠が存在していたことは確かであろう（図11）。

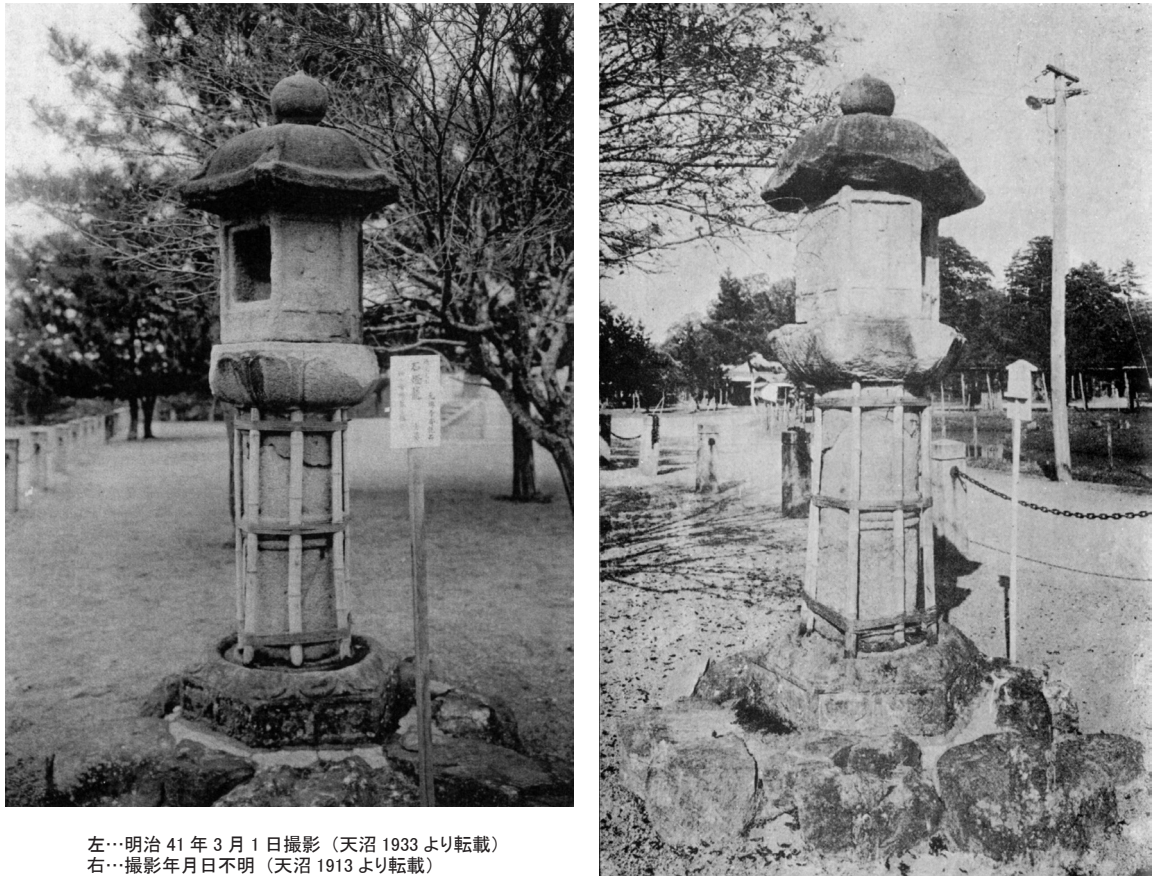
「啼燈籠」の名称がいつ頃から用いられたかは定かではないが、明治22年（1889）に石灯籠一対を売却する事件が起きており、それに関する一連の文書に「啼燈籠」の記述が見える。その後、明治33年（1900）3月29日には石灯籠二基が奈良皇室博物館に寄託されるが<sup>(2)</sup>（図12）、昭和5年（1930）11月20日付で二基ともに返還が通達、そのうち一基が「啼燈籠と称す」石灯籠であった。なお、二基の石灯籠は同年同月25日に境内への据え付けが完了している【庫裡15】。「啼燈籠」を写した寄託中の写真を見る限りでは、基壇を除く部材の特徴や欠損部分などが共通する、現在本堂前に位置する石灯籠がそれに該当すると理解できる。

境内に戻った「啼燈籠」は、昭和14年（1939）2月22日付で「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」に基づいて重要美術品に指定されたが<sup>(3)</sup>、昭和19年（1944）12月7日の昭和東南海地震（M7.9）で倒壊した後は放置されていたようである。



図11 『大和名所図会』に見える二基の灯籠  
（秋里1791（1995年復刻版））





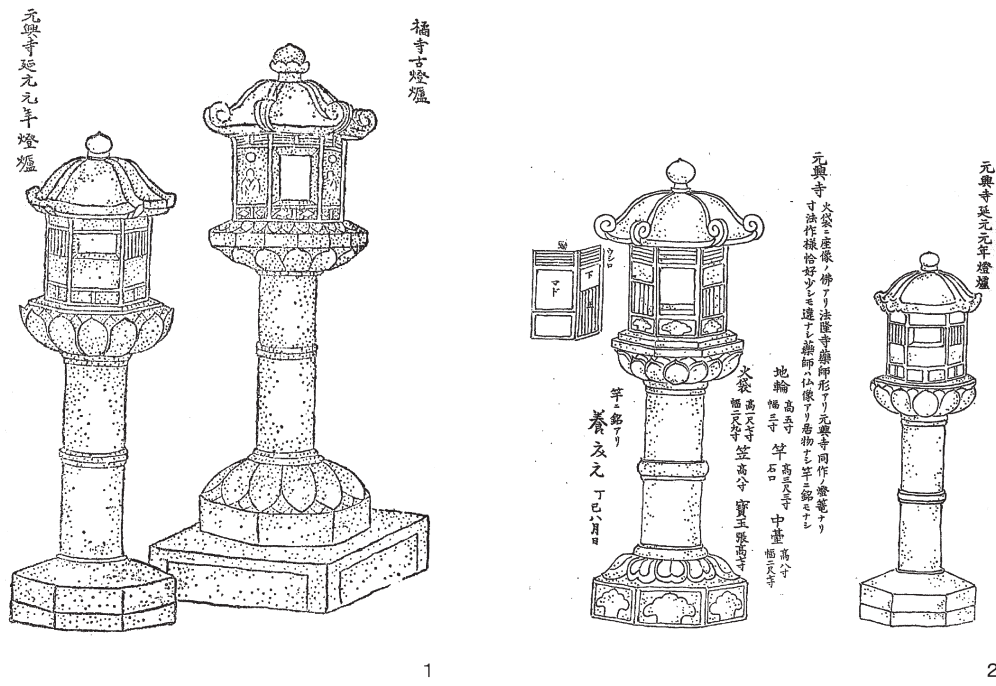
左…明治41年3月1日撮影（天沼1933より転載）  
 右…撮影年月日不明（天沼1913より転載）

図12 奈良皇室博物館に寄託中の「啼燈籠」

## (2) 研究史

調査研究の観点では、「啼燈籠」は鎌倉時代（延元元年）の紀年銘をもつ石灯籠として江戸時代から着目されていた。『擁書漫筆』（文化13年）には、「元興寺に延元元年の灯炉あり」と記し、挿図を載せている。また、『史料通信叢誌』（明治27年）や『茶道寶鑑』（明治41年）も同様の記述と挿図を載せるが、後者は二基分の挿図が掲載しているほか、うち一基については寸法などの形態的特徴も示している（図13）。

このような名所としての記述から、建築史や石造美術の観点から研究を進めたのが天沼俊一や川勝政太郎であった。天沼俊一は、奈良皇室博物館に寄託されていた「啼燈籠」の調査を行っており、銘文部分が磨滅しているため延元元年とする過去の指摘について評価できないとしつつも、略測図と寸法を提示したうえで形態や意匠の特徴から鎌倉時代の作品として差し支えないとした（図14、天沼1913）。その後天沼は、灯籠二基が境内に返還されてから銘文についての再評価しており、「下に右手に小さく「丁」の字らしいものが見える。延元元年は「丙子」だから、「丁」だと其次の二年の「丁丑」の「丁」かもしれない。其左りに「願主……」とあるやうである。「主」はたしからしいが「願」は少しくあやしい。」と記しており、銘文に検討の余地があることを指摘している（天沼1933）。川勝政太郎は、銘文については判読困難としつつも、基礎の蓮弁内側の溝と格狭間が陽刻になっている点を古いものでは珍しいとし、火袋二面中区の薬師如来坐像と阿弥陀如来坐像が「啼燈籠」の特色であると指摘している（川勝1935）。



※1 1…『擁書漫筆』より転載、2…『茶道寶鑑』下巻より転載  
 ※2 『茶道寶鑑』下巻には、灯籠が二基掲載されている。延元元年銘が「啼灯籠」と思われるが、もう一基についても「坐像ノ佛」や「薬師形」、竿銘文なしとしながらも銘文を記載し、「丁巳」など現在の「啼燈籠」で見られる特徴が確認できる。

図 13 明治以前の「啼燈籠」の描画

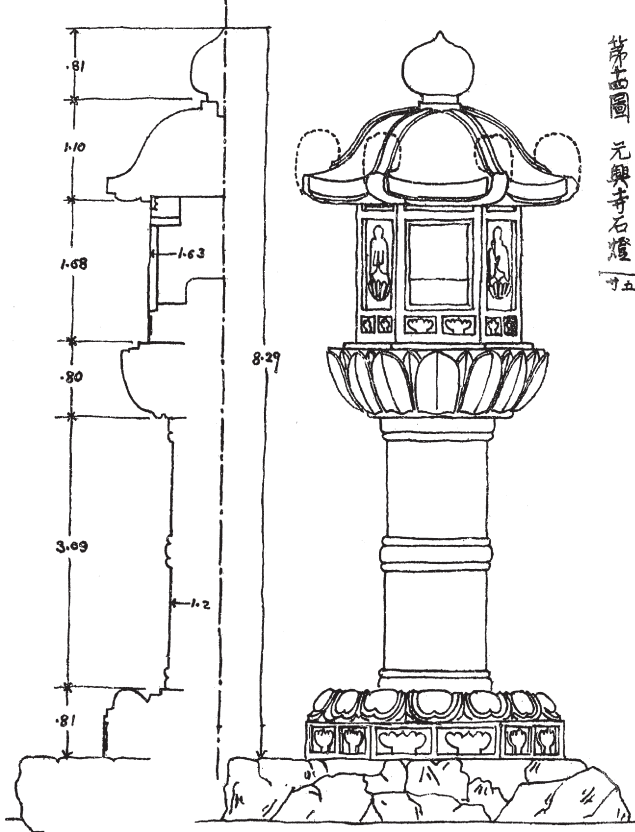


図 14 天沼俊一が作成した「啼燈籠」の図面  
 (天沼 1913 所収図面を改変して転載)



図 15 高田十郎採拓の拓本  
 (高田 1936 より転載)



「啼燈籠」の銘文について、新たな解釈を提示したのが高田十郎であった(図15、高田1936)。高田は、まず銘文の拓本を提示したうえで、天沼が指摘したように「丁」の字が明確であることから延元元年を否定している。さらに竿中節を挟んだ下を「四月」と読み、改元の月日を照会して「寶治」と「正嘉」に絞り込んだうえで、拓本の字画の様相を踏まえて「正嘉」と位置付けたのである。この高田の研究成果は、土井實や清水俊明などの後の研究者にも引き継がれており、現在も定説となっている。

### (3) 本調査の目的とねらい

ここまで見てきたように、元興寺塔址に所在する「啼燈籠」については江戸時代から延元元年銘を有する灯籠として知られていたが、明治22年(1889)の売却騒動や明治33年(1899)の奈良帝室博物館への寄託の際などで二基一対として語られることがしばしば認められた。しかし、それ以前の近世の記録や大正2年(1913)の天沼の実態調査以降、高田が年紀を修正した正嘉元年銘の「啼燈籠」のみが掲載されるなど、もう一基については不詳と言わざるを得ない。「啼燈籠」の伝承とそれが比定される石塔が、二基存在する石塔の中で混乱しているように見える。

そこで、この二基の石塔の実態を解明するため、まず現在「啼燈籠」と呼ばれている石灯籠について、実測図の作成と拓本を採取して各部の検討を行うこととした。加えて、高田の研究以降行われてこなかった銘文の解釈について、再評価を試みる。

### (4) 規模と概要

「啼燈籠」は、本堂前に所在し、平面六角形の花崗岩製基壇二段の上に配置する。基壇を除く残存総高は255.0cm、総幅は90.0cmを測る(図16)。

基礎上端は十二葉の複弁反花を刻出し、側面は二区で格狭間を陽刻している。竿との接続部分は、反花頂部よりやや低く、さらに周辺を溝状に彫り込んでいる。寸法については、一面の幅は40.4cm、総幅は90.0cm、高さはモルタルによる補修部分も含めて28.3cmを測る。

竿は三節で円柱をなし、やや胴が張る。幅はモルタルによる補修と剥落が広範囲に及んでおり、中節を挟んで銘文が若干残る。新たに拓本を採取したところでは、「□嘉元年丁□…／□主□…等」が読めるが、高田十郎の拓本では読めていた部分が剥落しているなど石材の状態が悪く、新たな銘文についても確認されなかった。そこで、高田の論文から拓本部分を画像化し、白黒を反転させることで文字部分を黒く表現して検証したところ、高田の見解を追認することができた(図17)。

中台は、下端から側面にかけて単弁十二葉の請花が覆い、上端および下端に一段の段形を設ける。上端の段形には何らかの彫り込みが成されており、形態は矢穴状であるものの位置などから矢穴とは言えないため、意図は不明と思われる。中台の損傷も著しく、破断したものを接合して修復している。残存部分から復元される幅は72.0cm、高さは23.5cmである。

火袋は、六面とも上区には横連子、下区には二区格狭間を配している。中区は火口一面、薬師如来坐像一面、阿弥陀如来坐像一面、上半を縦連子・下半を壁とするものが二面、上半を方形の窓・下半を壁とするものが一面となっている。一面の幅は30.0cm、総幅は59.0cm、高さは52.7cmを測る。

笠は、蕨手が全て欠損するが、反りはほとんどなく全体的に丸みを持つ。上面には降棟の表現と露盤を造り出し、軒下には蕨手に繋がる隅木の表現がある。下端には段形を設ける。残存幅は93.0cm、高さは35.0cmを測る。

宝珠に請花はなく、先端が欠損する。幅は22.5cm、残存高は19.5cmを測る。

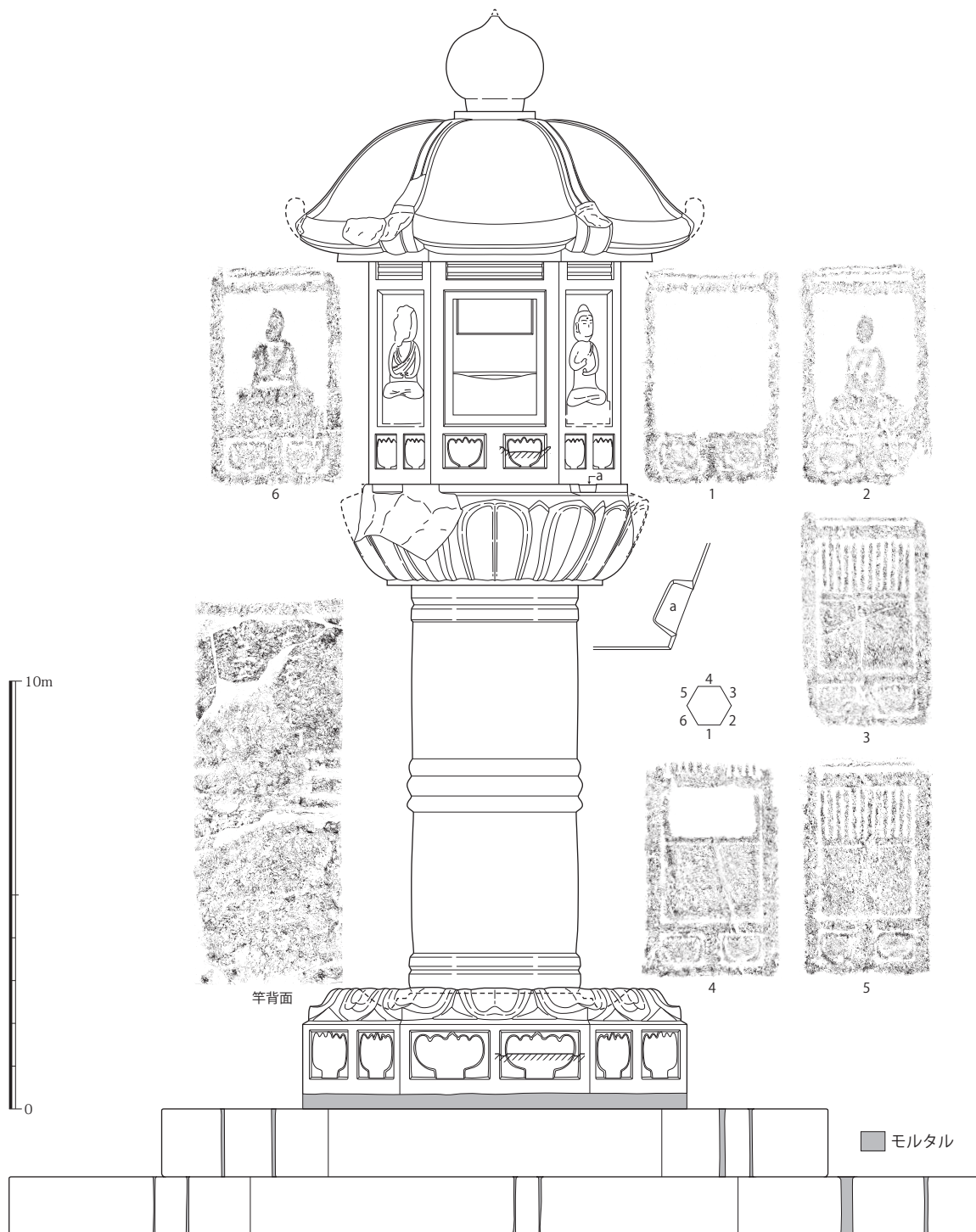
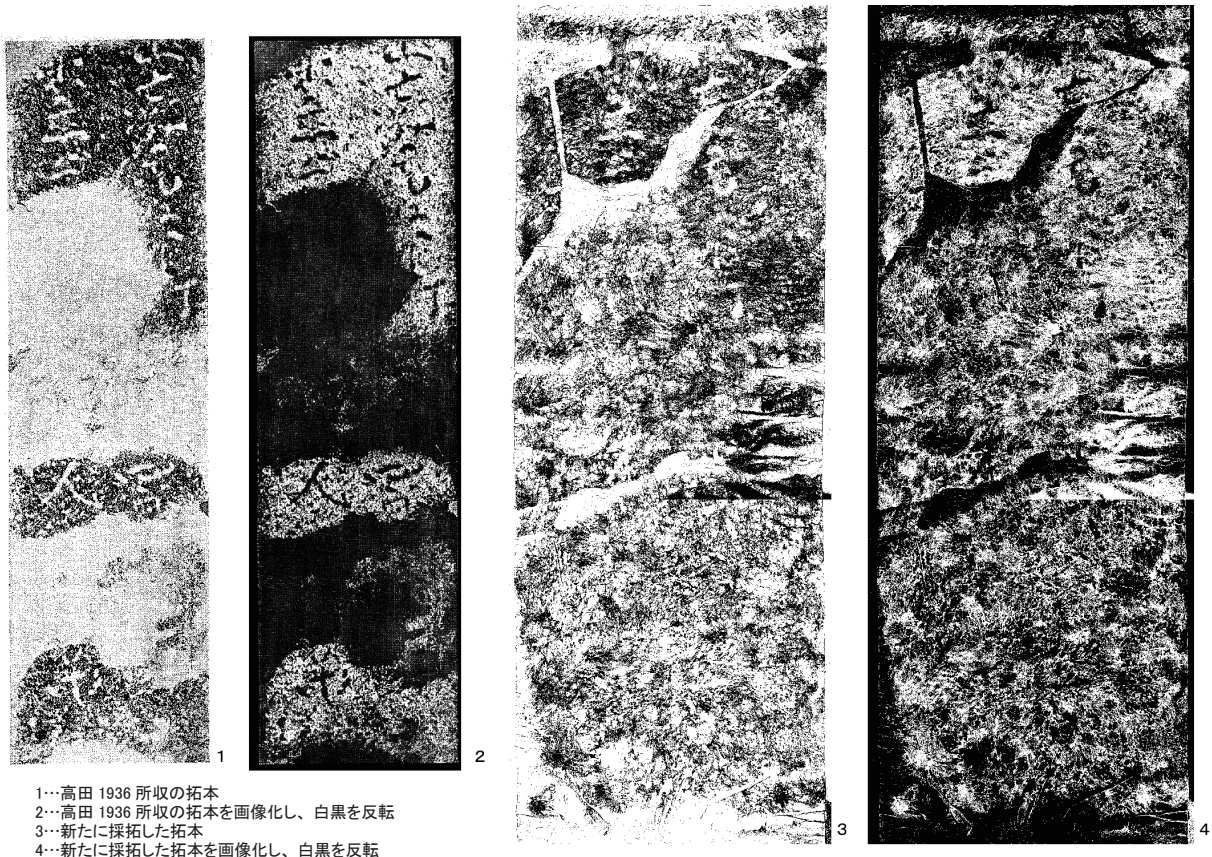


図 16 「啼燈籠」 実測図 (S=1/15)





1…高田 1936 所収の拓本  
 2…高田 1936 所収の拓本を画像化し、白黒を反転  
 3…新たに採拓した拓本  
 4…新たに採拓した拓本を画像化し、白黒を反転

図 17 地震による倒壊前後の拓本比較

### (5) 考察

**部材混在の可能性** 正嘉元年銘の「啼燈籠」は、奈良県下の紀年銘を有する中世の石灯籠では、東大寺法華堂石灯籠（建長 6 年銘）に次ぎ二番目に古い。近畿圏で見れば、旧鴻池家石灯籠（嘉禎 3 年銘）、道明寺天満宮石灯籠（康元 2 年銘）に次いで古く、白沙山荘石灯籠と同年同月銘である。これらを含めた同時代の石灯籠と比較しながら考察することとする。

まず、笠・火袋・竿については、一体のものともみて大過ないとする。笠は反らずに緩やかである点や火袋下段の格狭間が幅のピークが中位より上に位置している点は、鎌倉時代中期の特徴を反映していると思われる。

一方、宝珠と中台、基礎については、同じ灯籠の石材とするには些か疑問符が付く特徴を持つ。宝珠については、同時代の東大寺法華堂石灯籠や道明寺天満宮石灯籠は幅に対して高さが低いのにに対して、「啼燈籠」では幅と高さがほぼ同じである点が相違する。先端は欠損するが、立ち上がりの様子から鋭角に突出すると推定でき、近世以降の所産と考えられる。また、中台については笠に対する幅が短く、下端の段形は竿の幅に対して広い。また、下面には溝が巡るが、その直径とも竿の幅は合致しない。しかしながら、請花花弁の彫出は東大寺法華堂石灯籠や法隆寺石灯籠などと共通する表現であり、笠の幅と一致しない事例もあるため、鎌倉時代中期という年代を排除することはできない。検討の余地を残す。

基礎は、二区格狭間が陽刻になっている点にまず違和感を覚えるが、蓮弁が寝ておらず立ち上がっている点や間弁端部を明確に彫出しない点も新しい要素といえ、他の同時代資料と比較しても鎌倉時代中

期にはそぐわない特徴と考える。また、他の部材には破断や欠損、被熱を受けたことによる表面の風化が強いにも関わらず、基礎は比較的良好な状態を保っている。蓮弁の形態から近世に下ることはないと思われるが、正嘉元年とするにはさらに慎重な検討が必要である。

このように見ると、「啼燈籠」は複数時期の部材が混在して組みあがっているのではないだろうか。しかし、明確に位置付けるには様々な石灯籠の実測図の作成による比較と考古学的な検討が不可欠であり、ここでは可能性として指摘しておく。

**混在したのはいつか** それでは、現在の「啼燈籠」が、部材が混乱した状態であるとすれば、それはいつ成立したのであろうか。直近では平成 22 年（2010）の修復時が考えられるが、奈良帝室博物館寄託中の明治 41 年（1908）3 月 1 日撮影の写真と比較しても差異は認められない（図 12、天沼 1933）。つまり、笠の葺手が欠損している様子や火袋の仏像、基礎の格狭間が陽刻になっている点など「啼燈籠」の特徴が捉えられることから、部材が混在するとすれば奈良帝室博物館に寄託される以前ということになる。

「啼燈籠」の由緒として、明治 22 年（1979）に二基の石灯籠の売却騒動が起きていることは先に記したとおりであるが、それに関連する史料【庫裡 1-9】に但し書きとして灯籠の状態が記されている。そこには、「惣丈、壹丈余、火袋壹個、伶人舞之彫、壹個、仏像彫、中台式個共破、疵、柱式本共折疵、九輪玉式個共無之、地輪石及屋根、無事、右灯籠個数惣計破、共拾三個」とあり、明治 22 年（1979）の時点では二基の石灯籠は 13 個の破片になっていたことが分かる。また、火袋における「伶人」とは雅楽奏者のことであり、「舞之（人か?）」は舞楽を舞う人のことであるが、これは五重大塔基壇前に建つ下村某寄進の灯籠の火袋が該当すると思われる。また、史料では九輪玉すなわち宝珠は二基ともに欠失し、竿も折傷しているとするが、宝珠については今回の調査成果と合致し、竿が折れた灯籠は境内に「啼燈籠」と下村某寄進の灯籠以外に認められない。第 1 章で明らかにされたように、境内に所在する他の石灯籠が昭和 6 年（1931）以降の寄進であることを踏まえても、「啼燈籠」と一対の関係にあった灯籠は下村某が寄進した灯籠であると理解できる。

以上を鑑みれば、売却騒動から奈良帝室博物館に寄託されるまでの間に火災により断片になっていた二基の石灯籠を、新補材を得て復元した可能性が高い。部材の混乱はその際に生じたと考えられるが、地輪石すなわち基礎については無事としている点には注意を要する。各部材の形態的特徴から見る年代観と竿銘文には齟齬があると思われるが、新補材である宝珠を除く現材の組み合わせが造立当初からであった可能性も完全には捨てることはできない。このような、部材の年代が微妙に合わないことなどの問題が解消されていないため、組み合わせについては再度検討が必要と考える。

## (6) 小結

かつて重要美術品にも指定されていた「啼燈籠」であるが、当初は異なる姿であったことが明らかになってきた。その復元が今後必要になる作業であるが、下村某が寄進した石灯籠の調査のほか、停滞している同時代の石灯籠の考古学的な研究も併せて行う必要がある。

(坂本)

## 註

- (1) 本史料には成立年を欠くが、昭和初期の復興を経た戦後のものと考えられる（公益財団法人元興寺文化財研究所 2020）。以下、本文中の【 】は公益財団法人元興寺文化財研究所 2020 の資料番号に準拠している。
- (2) 奈良帝室博物館への寄託の経緯については、『明治三十一年博物館普通出陳表』（奈良県立図書情報館蔵）から分かる。つまり、奈良県は明治 32 年（1899）12 月 13 日付で元興寺の二基の灯籠を出陳する旨を帝国奈良博物館に照会し、博物館はその翌日に了承。翌年 2 月 22 日に当時の住職であった郭部戒津と信徒総代の中喜多勇次郎・隅山利八・生島小右エ門が連名で「博物館へ寄託品ノ義ニ付御願」を奈良県知事に対して奈良市長を介して提出している。同年同月 28 日に書類上は受理されたようであるが、正式に受託したのは一か月後であったようである。昭和 5 年（1930）には二基が返還されているものの、大正 2 年（1913）の調査報告では「啼燈籠」のみが報告されている（天沼 1913）。
- (3) なお、元興寺塔址は「史蹟名勝天然紀念物保存法」に基づいて昭和 7 年（1932）4 月 25 日に史跡指定、元興寺塔址土壇出土品は「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」に基づいて昭和 8 年（1933）1 月 23 日重要文化財に指定されている。

## 《参考・引用文献》（発行年順）

- 秋里籬島 1791 『大和名所図会』、歴史図書社、1971 年復刻  
 秋里籬島 1791 『大和名所図会』 版本地誌体系 3、臨川書店、1995 年復刻  
 高田与清 1816 『擁書漫筆』（『日本隨筆大成』 <第一期> 12、吉川弘文館、1975）  
 近藤瓶城編 1894 『史料通信叢誌』 第 6 編前、史料通信協會  
 宮崎幸麿編 1908 『茶道寶鑑』 下巻・石燈籠之部、青山堂書房  
 天沼俊一 1913 「天沼委員報告書」『奈良縣史蹟名勝地調査會報告書 第一回』、奈良縣（のちに『奈良県史蹟地調査会報告書 I』として財団法人大和文化財保存会が 1977 年に再版）  
 天沼俊一 1933 『石燈籠 総論・年表』、スズカケ出版部  
 川勝政太郎 1935 『燈籠・手水鉢』、河原書店  
 高田十郎 1936 「近頃目につきたる二三の金石文」（『大和志』 第 3 卷第 10 号、大和国史会）  
 天沼俊一 1940 『慶長以前の石燈籠』（再版）、スズカケ出版部  
 土井實 1956 『奈良縣銘文集』、大和歴史館研究会  
 上野武男 1959 「なき燈籠」（『大和の伝説』 高田十郎編、大和史蹟研究会）  
 川勝政太郎 1971 「石燈籠」（『日本石材工芸史』（改訂再版）、綜芸舎）  
 清水俊明編 1984 「元興寺の石造物」（『奈良県史』 第 7 卷石造美術、名著出版）  
 土井實編 1985 「元興寺 石燈籠」（『奈良県史』 第 16 卷金石文（上）、名著出版）  
 公益財団法人元興寺文化財研究所 2020 『華嚴宗元興寺所蔵歴史資料調査報告書』



## 第5章 古文書（補遺）

華嚴宗元興寺所蔵の古文書については、令和元年度に調査を行い、『華嚴宗元興寺所蔵歴史資料調査報告書』（元興寺文化財研究所、2020年）に目録・解題・主要資料の翻刻などを掲載してその成果を報告した。これはその時点で確認しえた古文書を悉皆的に対象としたものであったが、今年度新たに古文書が見いだされたため、補遺としてここに報告し、紹介することとする。

今年度見いだされた古文書は、紙袋に一括されたもので、近世・近代文書104点にのぼる。紙袋には、表面に「元興寺書類袋／慧玉／所持」、裏面に「大正七年六月」の墨書がある。慧玉は後述するように当時の元興寺住職である。内容は、明治・大正期の事務書類綴と、近世・近代の境内図・土地の実測図などの図面類が主なものである。

明治・大正期の史料は昨年度調査成果で空白であった時期を埋める史料群であり、図面類は近世からの境内地の景観の変遷を追うことができ、いずれも寺史や、史跡・文化財の残されてきた過程を知るうえでも重要な意味を有すると考えられる。以下（1）近世・近代史料、（2）図面類に分けて、概要を紹介する。なお資料番号は【 】で示し、補遺史料は本書所収の目録、それ以外は『華嚴宗元興寺所蔵歴史資料調査報告書』所収目録の番号に対応する。

### （1）近世・近代史料

【補遺 1-34】と【補遺 1-35】には主に近代史料が一括で綴込まれている。

このうち【補遺 1-34】には、享保13年（1728）「元興寺修補募縁序」、安政6年（1859）観音堂仮堂再建の願書などの近世文書も数少ないが含んでいる。享保13年「元興寺修補募縁序」は、従来知られてきた摺物の略縁起で、昨年度華嚴宗元興寺からも摺物（【庫裡 1-13】）が見いだされたものである。安政6年（1859）7月の観音堂仮再建の願書は、同年2月の大火による本堂観音堂の焼亡を受けて元興寺年預より提出されたものの控えである。再建願書提出のことは『東大寺年中行事記』同年7月22日条にもみえるが、願書そのものは新出史料となる。

【補遺 1-34】の他と【補遺 1-35】は、近代の願書や届の控えや、元興寺宛の通知や領収書などである。明治7年（1874）に東大寺宝珠院附弟から元興寺住職となった飛鳥長海、明治14年（1881）に兼務住職となった東大寺宝珠院の樋口堯快、明治44年（1911）から大正期にかけての元興寺住職であった窪田慧玉、昭和2年（1927）に兼務住職となった鷲尾隆慶の代のものがまとめられている。昨年度の成果で樋口堯恭、鷲尾隆慶の代の史料はある程度確認されていたが、飛鳥長海、窪田慧玉についてはほとんど史料が得られていなかったため、今回の追加調査でまさに空白を埋める史料が見いだされたことになる。

長海は明治2年（1869）に元興寺住職になることが願い出られ認められていたようだが（【庫裡 3】）、【補遺 1-35】によれば正式に元興寺の寺務を相続したのは明治7年（1874）のことであったらしい。長海は、相続に当たって師の宝珠院樋口堯恭に対し、元興寺の再興とともに、変わらず東大寺や宝珠院の意に従うことを誓約している。すなわち「元興寺者従往昔東大寺ノ末派ニシテ因縁深重ナル事明鏡ナリ、後代ニ至テ本末ヲ離叛仕間敷事」「寺務相続ノ上タリトモ師弟ノ有縁ナレハ後見ヲ依頼ハ勿論、若



モ師命違犯ニ於テハ住職進退本山執事之沙汰ニ背ク間敷事」などといった内容である。東大寺堂衆方の塔頭が元興寺年預を勤めていた近世のあり方から、明治期初頭には元興寺にも住職を置くこととなり、元興寺と東大寺との関係は変容を迫られていたが、師弟関係を媒介として、実質的な両寺の本末支配関係の継続が模索されていた様子がかがえる。次の樋口堯恭は東大寺宝珠院主で、長海の師であったが、どういうわけか明治14年(1881)から長海に代わって元興寺住職を兼務することとなった。これも【補遺 1-35】所収の「寺院住職届」により就任年次が明確となった。次の窪田慧玉代の史料は【補遺 1-35】に多く収められているが、ほとんどが領収書と借用地返還訴訟に関わる書類である。慧玉が明治44年(1911)には元興寺住職であったことは同年の『大和人名鑑』で知られたが、元興寺文書では【補遺 1-35】で初めて在任の徴証が得られた。

新出史料からは、こうした寺史に関わる知見が単に得られるだけではなく、今日に伝えられた文化財の履歴についても重要な情報が含まれている。

樋口堯恭兼務住職の代、明治18年(1885)には信徒惣代4人が連名で什物の預かり証を差し出している。堯恭は基本的には東大寺宝珠院にいたので、『華嚴宗元興寺所蔵歴史資料調査報告書』に述べた通りこの時期には元興寺の荒廃が進んでいた。この時期の元興寺を実質的に維持していたのは信徒総代らであったことがいよいよ明確となった。同時にこの預かり証は什物台帳としても貴重である。同様に、昭和2年に鷲尾隆慶の兼務住職就任にあたって作成された什物帳も見出だされた。植村拓哉氏が道昭法師坐像を例に指摘しているように(「道昭法師像のひみつ」元興寺・元興寺文化財研究所編『図説元興寺の歴史と文化財』吉川弘文館、2020年)、近代の什宝物帳には仏像の尊名の変化も見られる。仏像などがいかに祀られてきたかという点は資料としての歴史的評価にも関わることもあり、今回見いだされた什宝物帳も同様に注意されるべきであろう。

(服部光真)

## (2) 図面類

【補遺 1-1】～【補遺 1-33】は近世・近代の絵図・図面33点である。概ね元興寺境内とその周辺を描いたものである。

【補遺 1-1】(図版19)・【補遺 1-4】・【補遺 1-5】はいずれも墨色で元興寺と御霊神社の境内を描く。構図・注記内容・内題(大和国添上郡南都七大寺之内真言宗元興寺)が同じなのが特徴である。寛政9年(1797)の年紀を有する【補遺 1-4】以外は年紀を欠くため先行する本を特定することは難しいが、安政6年(1859)2月に焼亡した五重大塔が描かれており、いずれも安政6年以前の成立とすることができよう。内題及び差出は北→南方向で記されており北を上、南を下とみなせる。建物や鳥居や灯籠は図像として描かれているが、境界線は大半が線のみで表記される。建物や境界線には間数や坪数、屋根の形状等の注記が付されている。下部に差出でもある年預名と注記がある。注記には「御霊社者古来ヨリ元興寺鎮守ニ御座候事」「元興寺并御霊社等東大寺支配ニ御座候事」とあり、ついで「右之通ニ而元興寺ヨリ支配者不仕候得共、鎮守之儀ニ付書加元興寺ノ差上候様、本寺東大寺ノ差図ニ付左之通書加へ差上申候事」と記される。境内の間数・坪数の記載から境内地や建物の現状を届け出するために提出した絵図の控と位置づけられるが、提出先の記載はない。

【補遺 1-16】も「大和国添上郡南都七大寺之内真言宗元興寺」の内題があり、同様の構図を有する。左下に「明治二巳年八月十二日奈良県御役所江栄寛房持参シテ掛り大井徳太郎江相渡置候控也」とあって作成年代と提出先を知ることができる。安政6年(1859)2月の火災後の境内の状況が反映されて

おり、五重大塔や観音堂は仮堂に置き換わっている。【補遺 1-1】などと異なり図像は一切なく、下部には御霊社の注記が残されているものの位置を示すのみで、「御朱印五拾石」の六文字は抹消されており、明治初年の神仏分離と朱印地没収の影響が見て取れる。【補遺 1-16】は、【補遺 1-1】・【補遺 1-4】・【補遺 1-5】に基本的な構図を求めつつ明治初年の境内の実態を描いたのであろう。

「元興寺境内絵図」(【補遺 1-2】(巻頭図版 7、図版 19))は、彩色で元興寺境内と周辺を描くが御霊神社は描かれない。元興寺周囲の道路が井字状に描かれているのが特徴的である。内題が東→西方向に記されており東を上、西を下とできそうである。五重大塔・観音堂などの建物はもとより、灯籠・樹木・塀・垣根も図像として描かれている。ところどころ建物や垣の間数などの注記が見られるが、【補遺 1-1】・【補遺 1-4】・【補遺 1-5】ほど詳細ではない。さて、この絵図の最大の特徴は建物の図像であろう。五重大塔はところどころ瓦が落ちて土が剥き出しになっており、観音堂に至っては傾いて描かれている。宝永 4 年(1707)10 月 4 日の宝永地震で元興寺では観音堂が傾くなどの被害が出たことが知られており(「大和国寺社名所記録」『元興寺編年史料』下巻所収)、以後、安政 6 年(1859)2 月に焼失するまで修覆が延々続けられている。注記も破損が描かれた建物やその周辺に集中しており、本絵図は修覆のために作成されたと考えられる。また、前述の通り境内の周囲には井字状に道が描かれるが、北側が狐ヶ辻子町、南側が御霊之前町と記される。それぞれ芝突抜町、薬師堂町の別称である。【補遺 1-2】と同一の構図なのが【補遺 1-13】である。墨線のみで描かれるが境界線の間数の注記はより詳細である。【補遺 1-2】の下図とも考えられる。「元興寺境内絵図」(【補遺 1-15】)も【補遺 1-2】同様の構図だが差異が認められる。建物や塀の間数は注記されるが、建物の破損は描かれない。周囲の道に注目すると北側が狐ヶ辻町ではなく芝新屋町となっている。

「元興寺境内絵図」(【補遺 1-3】(図版 20))も元興寺境内とその周囲に井字状に道を描く凡例の字が東→西に記されており、東を上とできる。構図としては【補遺 1-2】に似るが、元興寺の建物は図像では表されず、代りに御霊神社の社殿と鳥居が図像で示されている。また、境内と周囲の道路の間に町家の区画を一軒ごとに表記している。本図の下部には凡例があり、朱線が「新溝」、青色の線が「古溝」とされている。青色の「古溝」は【補遺 1-2】でも境内の同じ位置に描かれているが、朱線の「新溝」は【補遺 1-2】に見られず、本図の成立は【補遺 1-2】以降と判明するが年紀を欠いている。朱線の「新溝」は塀や垣の外側を取り囲むように描かれ、境内南西側から南側の道まで伸びている。本絵図は「新溝」を掘るために作成されたと考えられる。

「元興寺観音堂御仮殿」(【補遺 1-17】)と「観音堂仮殿」(【補遺 1-18】(図版 20))は観音堂の図面である。【補遺 1-17】は平面図だが、【補遺 1-18】には平面図と側面からの立面図が描かれる。それぞれ「仮御殿」「仮殿」とあることから、安政 6 年(1859)2 月の焼失後に再建のため描かれた可能性がある。しかし焼失直後は従来の梁行 8 間 1 尺、桁行 7 間 6 尺の規模で再建を出願しており(【補遺 1-20】)、慶応 2 年(1866)に至って梁行 3 間、桁行 4 間半に縮小しての再建を出願している(【庫裡 3】)。【補遺 1-17】・【補遺 1-18】はともに梁行 5 間、桁行 6 間とされており規模が異なっている。再建計画段階で作成されたが、出願に至らなかったのであろうか。幕末の再建段階で作成された図としては「元興寺庫裏台所」(【補遺 1-26】)もある。文字通り庫裏台所の見取図で文久 2 年(1862)10 月の年紀がある。庫裏も安政 6 年(1859)2 月の火災で焼失しているが、4 年近く経過した段階で再建の計画が持ち上がったのであろうか。本図には朱線で二部屋書き加えられており計画の変更があったことも判明する。

「芝新屋町全図」(【補遺 1-11】)は芝新屋町の図面である。明治 2 年(1869)4 月の年紀があり、作成者として芝新屋町年寄善兵衛と行事佐兵衛の署名がある。但し方位記号があり、ペンをを用いて描線、

文字記入がなされていることから後年の写しである。「芝新屋町持図面抜萃」(【補遺 1-22】)は年紀・作成者が【補遺 1-11】と同じだが芝新屋町の一部のみ描いている。

〔元興寺周辺実測図〕(【補遺 1-10】(図版 21))は元興寺と周辺の地籍図である。境内の周囲には井字状に道が描かれその間に地割が描かれる。境内建物の表記はあるが図像はない。方位記号があって北を上としている。境内の周囲には芝突抜町、毘沙門町、薬師堂町、芝新屋町が描かれており、町ごとに彩色されている。四方には測量者・製図者、測量・製図の着手・終了の年月日、周辺各町の地主惣代と町長中村雅真の署名がある。測量は明治22年(1889)9月17日から22日に行われ、製図は翌年4月に行われている。【補遺 1-10】の関連資料としては〔芝突抜町南側・毘沙門町西側・薬師堂町北側・芝新屋町図綴〕(【補遺 1-29】)がある。芝突抜町、毘沙門町、薬師堂町、芝新屋町の四枚の地籍図を綴にしたものである。明治23年(1890)10月30日調製とあるが、測量・製図の時期と、測量者・製図者、測量・製図の着手・終了の年月日、周辺各町の地主惣代と町長中村雅真の署名・捺印があるのは【補遺 1-10】と同じである。

同時期の奈良の地籍図としては明治23年(1890)4月作成の「奈良町実測全図」(奈良県立図書情報館蔵)があるが、「奈良町実測全図」は「奈良町各大字ヲ実測セリ式千分一地籍図ニ拠リ」作成され、関野貞『平城京及大内裏考』の緒言によると明治22年(1889)に二千分一地籍図の調査が行われている。奈良県では明治20年(1887)の再設置後に地籍編製地籍地図の作成が進められている。【補遺 1-10】と【補遺 1-29】はこの地籍調査の動きの中で作製されたと考えられる。

明治23年(1890)作成の地籍図に続くものとして、明治44年(1911)作成の一群がある。【補遺 1-6】(図版 21)・【補遺 1-8】・【補遺 1-14】である。3点とも内題を「元興寺寺院境内実測図」とし、西を上として描かれ、下に立会人谷口忠夫、実測手野間徳松の署名を有する。3点とも境界の間数の注記が多く境内境界の実測図と考えられる。【補遺 1-14】は最も記載が簡略で境界とその長さ、境内面積を記載するにとどまる。【補遺 1-8】では文字情報が増え、隣接地の地主の立合がなされたことが記されるほか、境内周囲の溝が描かれ、境界標石が朱点で示されている。【補遺 1-6】は最も情報が多く、大塔跡・本堂・庫裏の位置が示されるほか、明治44年(1911)9月8日実測、同月28・29日に境界標石を設置したことが記される。なお、このときの実測に関する領収書などが【補遺 1-35】中に確認できる。

「大正八年十二月九日整理奈良市芝新屋町元興寺境内一部分貸地調査図」(【補遺 1-25】(図版 22))は大正8年(1919)の作成である。「元興寺境内一部分貸地」とあるように境内地の貸借に関わって作成された。【補遺 1-35】中の資料から明治末から大正前期にかけて境内土地が借地にされていたことが判明する(【補遺 1-35-43】など)。直接的な原因は不明だが、大正7年(1918)10月に「御寺官有地侵蝕又ハ占有等ノ儀ニ付御協議致」したいとして元興寺住職に奈良市から通知が来ている(【補遺 1-35-49】)。ついで、数度にわたり奈良市長から元興寺に対して「御寺ニ係ル官有地調査ノ結果、侵蝕又ハ占有セルモノニ対シテハ返地復旧方通知越候条、至急処理ノ上其顛末」を報告するよう命じられている(【補遺 1-35-51】)。これを受けて元興寺から土地借用地者数名に対して明け渡し請求がなされたようで返還に応じた者もいるが(【補遺 1-35-48】)、このうち巽寅吉なる者とは訴訟に発展、大正9年(1920)1月に元興寺の勝訴となり巽は返還に応じている(【補遺 1-35-58】、【補遺 1-35-59】)。

今回紹介した【補遺 1】の資料を一括していた紙袋には「大正七年六月」の年紀が墨書で記される。おそらく、この土地明け渡し請求とその後の裁判のために、近世絵図、地籍図を問わず境内図が集められ、さらに関連書類が収納されたと考えられる。

「元興寺境内建物配置図」(【補遺 1-7】)・「元興寺境内実測図」(【補遺 1-9】(図版 22))・「元興寺附近(畧)地図」(【補遺 1-12】)については、年紀と印から、昭和5年(1930)に元興寺住職に就任した水野圭真により作成されたものである。水野圭真は住職就任後まもなく寺内の復興に着手し同年の内に第一期工事を終えているが、【補遺 1-9】はその翌年昭和6年(1931)5月に調査されたもので、水野圭真による復興の様相を窺える。同様の図としては、水野圭真による復興の記録というべき「元興寺記録」(【庫裏 15】)中の「元興寺建物配置図」がある。昭和5年(1930)9月3日に圭真は庫裡をはじめとする境内建物の起工の認可を申請しているがその添付図にあたる。この図では本堂と中門が「已設」とされ、他の建物は建築予定であったことがわかるが、【補遺 1-9】でも色分けで本堂と中門が「在来建物」、他は「新設建物」とされている。両図の相違点としては「元興寺記録」(【庫裏 15】)中の「元興寺建物配置図」には境内北西に不動堂があるが、【補遺 1-9】にはなく、かわって本堂背後に建物が増築されている。「元興寺記録」(【庫裏 15】)によると、不動堂は着工されなかったという。また、本堂増築工事は昭和6年(1931)9月に出願されており、【補遺 1-9】の調査時(同年5月)には本堂に増築はなかった。【補遺 1-9】では本堂背後に観音堂礎石の上に本堂増築部分が描かれており、後から書き加えられた可能性もある。【補遺 1-12】は昭和5年(1930)9月3日の申請書に同様の図が添付されており控と考えられる。【補遺 1-7】は「元興寺記録」(【庫裏 15】)中の「元興寺建物配置図」に似るが、不動堂や本堂増築部分は見えず、五重大塔跡の表記もなく、不動堂着工取り止めによる訂正図と考えられる。

(酒井雅規)



表8 華嚴宗元興寺古文書目録(補遺)(1)

資料番号		名称	員数	形状	法量縦 (cm)	法量横 (cm)	年月日	西曆	銘文等	備考
補遺	1 1	大和国添上郡南都七大寺之内真言宗元興寺	1	絵図	123.5	85.5	(江戸) ---	-	【内題】大和国添上郡/南都七大寺之内/真言宗/元興寺 【作成】元興寺年預/自性院	補遺 1-1 ~ 1-35 袋一括。袋表墨書「元興寺書類袋/慧玉/所持」。袋裏墨書「大正七年六月」。紙数 13 枚。墨色。
補遺	1 2	元興寺境内絵図	1	絵図	85.5	89.2	(江戸) ---	-	【内題】元興寺境内絵図	紙数 6 枚。著色。
補遺	1 3	元興寺絵図境内	1	絵図	86.0	85.5	(江戸) ---	-	【外題】元興寺絵図境内	紙数 9 枚。著色。
補遺	1 4	大和国添上郡南都七大寺之内真言宗元興寺	1	絵図	82.5	83.5	(江戸) 寛政 9.-	1797	【内題】大和国添上郡/南都七大寺之内/真言宗/元興寺	紙数 5 枚。墨色。
補遺	1 5	大和国添上郡南都七大寺之内真言宗元興寺	1	絵図	74.4	78.1	(江戸) ---	-	【内題】大和国添上郡/南都七大寺之内/真言宗/元興寺 【作成】元興寺年預/持宝院	紙数 6 枚。墨色。
補遺	1 6	元興寺寺院境内実測図	1	絵図	55.0	39.5	(明治以降) 明治 44.9.8 (実測) (明治以降) 明治 44.9.28 ~ 29 (境界石掘)	1911	【内題】元興寺/寺院境内/実測図 【作成】立会人 谷口忠夫氏/実測手/野間徳松(朱印)	紙数 1 枚。著色。
補遺	1 7	元興寺境内建物配置図	1	絵図	29.8	41.1	(明治以降) ---	-		紙数 1 枚。著色。縮尺 1/300。左下に「元興寺住職/水野/圭真」(単郭陽刻朱方印)あり。
補遺	1 8	元興寺寺院境内実測図	1	絵図	55.1	39.6	(明治以降) 明治 44.9.8 (実測)	1911	【内題】元興寺/寺院境内/実測図 【作成】立会人 谷口忠夫氏/実測手/野間徳松(朱印)	紙数 1 枚。著色。
補遺	1 9	元興寺境内実測図	1	絵図	74.8	110.8	(明治以降) 昭和 6.5.-	1931	【内題】昭和六年五月調査/元興寺境内実測図	紙数 2 枚。著色。縮尺 1/100。
補遺	1 10	[元興寺周辺実測図]	1	絵図	78.4	107.1	(明治以降) 明治 23.4.23	1890	【作成】奈良県技手/測量者 福西浅吉/全/製図者 塚本松治 【銘文】測量着手/明治二十二年九月十七日/全終了/全年九月二十二日/製図着手/全二十三年四月三日/全終了/全年全月二十三日	紙数 8 枚。著色。
補遺	1 11	芝新屋町全図	1	絵図	39.3	55.0	(明治以降) 明治 2.4. (原)	1869	【内題】芝新屋町全図 【作成】芝新屋町/年寄 喜兵衛/行司 佐兵衛	紙数 1 枚。著色。後年の写しか。
補遺	1 12	元興寺附近(畧)地図	1	絵図	29.7	55.5	(明治以降) ---	-	【内題】元興寺附近(畧)地図	紙数 1 枚。著色。左上に「元興寺住職/水野/圭真」(単郭陽刻朱方印)あり。
補遺	1 13	[元興寺境内絵図]	1	絵図	93.4	88.1	(江戸) ---	-		紙数 6 枚。墨色。
補遺	1 14	元興寺寺院境内実測図	1	絵図	55.4	39.3	(明治以降) 明治 44.9.8	1911	【内題】元興寺/寺院境内実測図 【作成】立会人 谷口忠夫氏/実測手/野間徳松(朱印)	紙数 1 枚。著色。
補遺	1 15	元興寺境内絵図	1	絵図	80.5	70.5	(江戸) ---	-	【内題】元興寺境内絵図	紙数 6 枚。著色。
補遺	1 16	大和国添上郡南都七大寺之内真言宗元興寺	1	絵図	46.8	47.7	(明治以降) 明治 2.8.12	1869	【内題】大和国添上郡/南都七大寺之内/真言宗/元興寺 【作成】元興寺 【奥書】明治二巳年/八月十二日奈良県御役所江采寛房/持参シテ掛り大井徳太郎江相渡置候控也	紙数 5 枚。墨色。
補遺	1 17	元興寺観音堂御仮殿	1	絵図	28.4	40.7	(江戸) ---	-	【内題】元興寺観音堂御仮殿	紙数 1 枚。著色。
補遺	1 18	観音堂仮殿	1	絵図	32.6	24.5	(江戸) ---	-	【内題】観音堂仮殿	紙数 1 枚。墨色。
補遺	1 19	元興寺境内之絵図	1	絵図	48.7	61.8	(江戸) ---	-	【外題】元興寺/境内之絵図	紙数 2 枚。墨色。

表9 華嚴宗元興寺古文書目録（補遺）（2）

資料番号			名称	員数	形状	法量縦 (cm)	法量横 (cm)	年月日	西暦	銘文等	備考
補遺	1	20	御窺奉申上候（観音堂再建につき）	1	状	27.4	74.6	（江戸） 安政 7.3.-	1860	【差出】 南都鶴町／受負大工／門太夫印／同所公納堂町／南組大工組頭／弥兵衛印 【宛所】 中井小膳様／御役所 【裏書】 表絵図書付之通雖為／御制禁作事御許容候間／可細工者也／〈申〉 閏三月中小膳御印	紙数 2 枚。
補遺	1	21	〔元興寺境内図〕	1	絵図	24.3	32.9	（明治以降） -.-	-		紙数 1 枚。著色。 近代の写し。
補遺	1	22	芝新屋町持図面抜萃	1	絵図	23.3	27.2	（明治以降） 明治 2.4.-（原）	1869	【内題】 芝新屋町全図 【作成】 芝新屋町／年寄 喜兵衛／行司 佐兵衛	紙数 1 枚。墨色。後年の写し。
補遺	1	23	〔元興寺境内図〕	1	絵図	31.6	55.7	（明治以降） -.-	-		紙数 1 枚。墨色。
補遺	1	24	元興寺庫裏台所	1	絵図	28.2	40.3	（江戸） -6.26	-	【内題】 元興寺庫裏台所	紙数 1 枚。著色。
補遺	1	25	大正八年十二月九日整理奈良市芝新屋町元興寺境内一部分貸地調査図	1	絵図	38.2	55.7	（明治以降） 大正 8.12.9	1919	【内題】 大正八年十二月九日整理／奈良市芝新屋町／元興寺境内一部分貸地調査図 【外題】 大正八年十二月九日整理／奈良市芝新屋町／元興寺境内一部分貸地調査図	紙数 1 枚。著色。
補遺	1	26	元興寺庫裏台所	1	絵図	27.5	40.7	（江戸） 文久 2.10.-	1862	【内題】 元興寺庫裏台所	紙数 1 枚。著色。
補遺	1	27	〔借地人名并二坪数〕	1	絵図	27.7	39.6	（明治以降） -.-	-		紙数 1 枚。著色。巽ノ分、森中ノ分、辻井亀松ノ分、吉田ノ分、中島ノ分、佐野ノ分、小西新約ノ分、隅山利ハの各図からなる。
補遺	1	28	元興寺分（見取図）	1	絵図	24.1	33.2	（明治以降） -.-	-	【内題】 元興寺分	紙数 1 枚。墨色。
補遺	1	29	〔芝突抜町南側・毘沙門町西側・薬師堂町北側・芝新屋町図綴〕	1	絵図・綴	20.9	29.4	（明治以降） 明治 23.10.30	1890	【銘文】 明治廿三年十月三十日調製／測量着手明治二十二年九月十七日／全 終了 全 二十二日／製図着手全二十三年四月三日／全終了全 二十日 【作成】 奈良県技手／測量者 福西浅吉印／全／製図者 塚本松治印	紙数 4 枚。著色。芝突抜町南側、毘沙門町西側、薬師堂町北側、芝新屋町の図からなる。各図に町長中村雅真と周辺各町の地主惣代の署名あり。
補遺	1	30	〔元興寺境内周辺図〕	1	絵図	29.9	55.7	（明治以降） -.-	-		紙数 1 枚。墨色。
補遺	1	31	毘沙門町境借地人名并二坪数	1	絵図	27.7	39.4	（明治以降） -.-	-	【内題】 毘沙門町／借地人名并〈二〉坪数	紙数 1 枚。墨色。
補遺	1	32	〔某所実測図〕	1	絵図	12.8	29.5	（明治以降） -.-	-		紙数 1 枚。墨色。
補遺	1	33	〔某所実測図〕	1	絵図	18.7	35.1	（明治以降） -.-	-		紙数 1 枚。鉛筆書。
補遺	1	34 1	元興寺修補募縁序	1	横帳	24.6	18.1	（江戸） 享保 13.-	1728	【外題】 南都元興寺略縁起 【内題】 元興寺修補募縁序 【差出】 勸化沙門持宝院／真英〔印〕	補遺 1-34-1～1-34-7 綴一括。 摺刷。
補遺	1	34 2	諸届綴込	1	綴	24.0	16.5	（明治以降） 明治 16.8.29	1883	【表紙墨書】 明治十六年八月廿九日／諸届綴込	明治 16.8.29 元興寺明細帳（元興寺兼務東大寺塔中宝珠院住職樋口堯恭→）、明治 16.8.29 御届（檀家惣代選定につき）（元興寺兼務東大寺塔中宝珠院住職樋口堯恭→戸長役場御中）、明治 21.6.5 物入老字再建御届（樋口堯恭→税所篤殿、平田好殿）、元興寺宝物古器物目録
補遺	1	34 3	元興寺表ケヌキ門	1	一紙	12.0	16.3	（明治以降） -.-	-		



表10 華嚴宗元興寺古文書目録(補遺)(3)

資料番号				名称	員数	形状	法量縦 (cm)	法量横 (cm)	年月日	西暦	銘文等	備考
補遺	1	34	4	口上書(現在除地につき)	1	横帳	27.3	19.9	(明治以降) 明治5.4-	1872	【差出】芝新屋町/元興寺/長海(黒印)/同町年寄/松田喜六 【宛所】奈良県/御役所様	末尾に奥書1枚あり。
補遺	1	34	5	元興寺縁起	1	状	15.4	16.3	(明治以降) --	-	【差出】大和国奈良芝新屋町/元興寺 【印刷者】印刷 奈良橋本町 坂田活版所	印刷。
補遺	1	34	6	口上覚(観音堂再建につき)	1	横帳	24.4	16.7	(江戸) 安政6.7.25	1859	【差出】元興寺年預/長得坊印 【宛所】御奉行所	
補遺	1	34	7	奉願上候口上覚(観音堂仮建につき)	1	横帳	27.8	20.3	(江戸) 安政6.7.23	1859	【差出】元興寺年預/長得坊印 【宛所】御奉行所	
補遺	1	35	1	証(元興寺寺務相続につき)	1	縦帳	-	-	(明治以降) 明治7.1-	1874	【差出】元興寺住職/飛鳥長海(黒印)/里元/原田吉次(黒印) 【宛所】御師範/宝珠院住職/樋口堯恭様	補遺1-35-1~1-35-63綴一括。 罫紙。
補遺	1	35	2	稟証(金60円下賜につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治8.2.18	1875	【差出】中性院住職/中野量海(朱印) 【宛所】大恩師樋口堯恭様	
補遺	1	35	3	[証](小生離山、金15円落手につき)	1	一紙	-	-	(明治以降)明 治8.5.4	1875	【差出】中野量海(朱印) 【宛所】樋口堯恭殿	
補遺	1	35	4	譲受之事(退院後難渋、金5円につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治8.10.27	1875	【差出】奈良北袋町/寄留中野量海(朱印) 【宛所】樋口堯恭殿	罫紙(証券界紙)。
補遺	1	35	5	退職二付思召金之事(金50円請取につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治8.10.-	1875	【差出】中性院住職/中野量海(黒印) 【宛所】御師範/宝珠院住職/樋口堯恭殿	罫紙。
補遺	1	35	6	寺院住職届(明治14年8月17日より元興寺兼務につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治16.6.15	1883	【差出】山城国相楽郡平尾村/百八拾九番地平民西長次郎全居/樋口堯恭印 【宛所】大阪府知事建野郷三殿	罫紙。
補遺	1	35	7	[元興寺什物預り証]	1	綴	-	-	(明治以降) 明治18.11.20	1885	【差出】信徒総代/隅山利八(朱印)/生嶋小三郎(黒印)/山中亀蔵(黒印)/中喜田勇治郎(黒印)	罫紙。
補遺	1	35	8	御届(聖林寺前住職安部島義詮死亡につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治31.5.15	1898	【差出】聖林寺住職/権律師安部島本明(朱印) 【宛所】本山奈良/東大寺々務所/御中	罫紙。
補遺	1	35	9	命令書(木造薬師如来立像、奈良帝室博物館へ出陳につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治39.3.31	1906	【差出】内務大臣原敬[朱印] 【宛所】奈良県奈良市元興寺	罫紙。
補遺	1	35	10	[書簡](函面訂正につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治44カ) .9.9	-	【差出】野間 【宛所】谷口忠夫殿	罫紙。
補遺	1	35	11	領収証(謝礼金領収につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治44.9.30	1911	【差出】川辺長藏(朱印) 【宛所】窪田恵玉殿	
補遺	1	35	12	証(境内実測料金領収につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治44.9.11	1911	【差出】奈良市御所馬場町/野間徳松(朱印) 【請取】戒壇院住職/窪田御上様	罫紙。
補遺	1	35	13	記(印紙代・手数料受取につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治44.10.7	1911	【差出】奈良税務署前/代筆 鈴木(朱印) 【宛所】東大寺/戒壇院様	
補遺	1	35	14-1	証(実地臨検車賃等につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治44.10.14	1911	【差出】奈良市角振町/磯田法律事務所[朱印] 【宛所】窪田恵玉殿	補遺1-35-14-1~1-35-14-2一紙に記載。罫紙。
補遺	1	35	14-2	覚(預り金差引につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) --	-	【差出】谷口 【宛所】窪田様	
補遺	1	35	15	領収書(日当6人分につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治44.9.30	1911	【差出】東笹鉦町/今井富三 【宛所】元興寺/御住職様	
補遺	1	35	16	元興寺本堂御拜天井縁側戸締普請設計書	1	縦帳	-	-	(明治以降) 明治45.6.-	1912	【作成】元興寺執事打	罫紙。
補遺	1	35	17	領収書(瓦釘代につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.10	1912	【差出】奈良市今小路町/河合利三郎 【宛所】元興寺様	
補遺	1	35	18	領収書(金80円につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.11	1912	【差出】東包永町/上田菊松(朱印)	罫紙。
補遺	1	35	19	領収書(御拜殿木殿下延石据え付け・古石材作り直し代につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.-	1912	【差出】奈良市押上町九番屋敷/長谷川亀治郎(黒印) 【宛所】元興寺様	罫紙。
補遺	1	35	20	領収証(格子戸6枚代につき)	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.26	1912	【差出】奈良市南城戸町/川崎福松(朱印) 【宛所】元興寺々務所/窪田殿	罫紙。

表 11 華嚴宗元興寺古文書目録（補遺）（4）

資料番号				名称	員数	形状	法量 縦 (cm)	法量 横 (cm)	年月日	西暦	銘文等	備考
補遺	1	35	21	キ（針金代・釘代等請取につき）	1	継紙	-	-	(明治以降) 大正 2.10.30	1913	【差出】 奈良市西新 [ ] / 平井安 [ ] 【宛所】 海台寺様	
補遺	1	35	22	請求書（元興寺修繕大工手間につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .10.25	1912	【差出】 東包永町 / 上田菊松（朱印） 【宛所】 元興寺上様	
補遺	1	35	23	請求書（石材・石工定備共賃金）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .10.28	1912	【差出】 奈良市押上町 / 長谷川亀治郎（黒印） 【宛所】 元興寺様	罫紙。
補遺	1	35	24	領収書（石材・石工定備共賃金）	1	一紙	-	-	(明治以降) (大正元カ) --	1912	【差出】 奈良市押上町九番屋敷 / 長谷川亀治郎（黒印） 【宛所】 元興寺様	罫紙。
補遺	1	35	25	〔覚〕（樅・杉代につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) --	-	【差出】 奈良市今在家町 / 鍵田材木店 【宛所】 林殿	
補遺	1	35	26	領収証（樅・杉代につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .11.2	1912	【差出】 奈良県奈良市今在家町十三番屋敷 / 鍵田万次郎（朱印） 【宛所】 奈良市元興寺町 / 久保田様	罫紙。
補遺	1	35	27	請求書（元興寺材木割物運搬賃金につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .10.18	1912	【差出】 奈良市雑司町 / 倉田亀吉 【宛所】 元興寺御中	罫紙。
補遺	1	35	28	〔請求書〕（瓦代・葺代につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.30	1912	【差出】 東包永町 / 上田菊松 【宛所】 海財院上様	罫紙。
補遺	1	35	29	領収書（向拝屋根葺師・手伝代等につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.29	1912	【差出】 奈良市奈良阪町 / 鈴木信吉（朱印） 【宛所】 元興寺御中	罫紙。
補遺	1	35	30	領収書（向拝用瓦代につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.29	1912	【差出】 奈良市奈良阪町 / 鈴木信吉（朱印） 【宛所】 元興寺 / 御中	罫紙。
補遺	1	35	31	領収書（金3円50銭受取につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.31	1912	【差出】 東包永町 / 上田菊松（朱印） 【宛所】 戒壇院上様	罫紙。
補遺	1	35	32	請求書（本殿周囲壁請負金につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.23	1912	【差出】 奈良市花芝町 / 笹西金松（朱印） 【宛所】 元興寺々務所 / 御中	罫紙。
補遺	1	35	33	領収書（瓦代金につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 2.1.11	1913	【差出】 奈良市奈良阪町 / 鈴木又市（朱印） 【宛所】 元興寺様 / 御中	罫紙。
補遺	1	35	34	証（弁当・会席・酒代受取につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) --	-	【差出】 奈良市元興寺町 / 八百善事栗岡秀治郎 【宛所】 元興寺 / 久保田御氏様	罫紙。
補遺	1	35	35	請求書（33円40銭につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.25	1912	【差出】 奈良市十輪院町 / 梅屋熊次郎（朱印） 【宛所】 元興寺様	罫紙。
補遺	1	35	36	請求書（葺師賃・手伝賃・銅線代につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.24	1912	【差出】 奈良市奈良阪 / 鈴木信吉（朱印） 【宛所】 元興寺様御中	罫紙。
補遺	1	35	37	領収書（戸障子代金につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .11.30	1912	【差出】 奈良市南城戸 / 川崎福松（朱印） 【宛所】 元興寺御住職様	罫紙。
補遺	1	35	38	請求書（向拝用瓦代につき）	1	綴	-	-	(明治以降) 大正元 .12.24	1912	【差出】 奈良市奈良阪 / 鈴木信吉（朱印） 【宛所】 元興寺様 / 御中	罫紙。
補遺	1	35	39	請求書（御拝殿木殿下延石据え付け・古石材作り直し代につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.24	1912	【差出】 奈良市押上町九番屋敷 / 長谷川亀二郎（黒印） 【宛所】 元興寺様	罫紙。
補遺	1	35	40	請求書（格子戸6枚代につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.22	1912	【差出】 奈良市南城戸町 / 川崎福松（朱印） 【宛所】 元興寺々務所 / 御中	
補遺	1	35	41	領収証（金20銭につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正元 .12.24	1912	【差出】 奈良市十輪院町 / 材猪事 / 上久保材木店（朱印） 【宛所】 殿	
補遺	1	35	42	〔本堂工事記録〕	1	綴	-	-	(明治以降) 大正元 .9.11 ~ 大正元 .10.29	1912		
補遺	1	35	43	土地借用証書	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 6.12.31	1917	【差出】 奈良市毘沙門町 / 借地人村田竹蔵（朱印） 【宛所】 元興寺住職 / 窪田恵玉殿	罫紙。
補遺	1	35	44	土地借用証書	1	一紙	-	-	(明治以降) 明治 44.10.14	1911	【差出】 奈良市芝新屋町 / 吉田芳太郎（朱印） 【宛所】 元興寺住職 / 窪田恵玉殿	
補遺	1	35	45	土地借用契約証書	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 5.12.31	1916	【差出】 奈良市光明院町拾八番屋敷 / 株式会社奈良銀行取締役頭取木本源吉（朱印） 【宛所】 元興寺住職 / 窪田恵玉殿	罫紙。

表12 華嚴宗元興寺古文書目録（補遺）（5）

資料番号				名称	員数	形状	法量縦 (cm)	法量横 (cm)	年月日	西暦	銘文等	備考
補遺	1	35	46	誓約書（借用地返却につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 8.9.27	1919	【差出】奈良市鶴町／杉山嘉平（朱印） 【宛所】元興寺住職／窪田恵玉殿	罫紙。
補遺	1	35	47	土地借用証書	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 5.12.31	1916	【差出】奈良市鶴町／借地人／杉山嘉平（朱印） 【宛所】元興寺住職／窪田恵玉殿	罫紙。
補遺	1	35	48	誓約証（拝借土地返却につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 8.9.27	1919	【宛所】元興寺住職／窪田恵玉殿	罫紙。 ペン書「東笹鉦町／谷口忠夫二書クコト」とあり。
補遺	1	35	49	〔通知〕（御寺官有地侵蝕または占有の儀協議につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 7.10.25	1918	【差出】奈良市長 西庄久和〔朱印〕 【宛所】元興寺住職殿	
補遺	1	35	50	其筋二通牒（官有地侵蝕または占有の者返地復旧すべきにつき）	1	一紙	-	-	(明治以降) ---	-		
補遺	1	35	51	〔通知〕（官有地侵蝕・占有返地復旧の顛末報告すべきにつき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 7.11.27	1918	【差出】奈良市長 西庄久和〔朱印〕 【宛所】元興寺／住職窪田慧玉殿	
補遺	1	35	52	〔通知〕（官有地侵蝕・占有返地復旧の顛末報告すべきにつき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 7.12.19	1918	【差出】奈良市長 西庄久和〔朱印〕 【宛所】元興寺	
補遺	1	35	53	〔照会〕（史蹟勝地保存補助書面提出につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) ---	-		
補遺	1	35	54	〔通知〕（御寺官有地侵蝕または占有の儀協議につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 8.4.21	1919	【差出】奈良市長 西庄久和〔朱印〕 【宛所】元興寺住職窪田慧玉殿	
補遺	1	35	55	〔通知〕（御寺侵蝕者出頭通知、午前9時までに来庁依頼につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) -5.8	-	【差出】奈良市役所／第二課学事係（朱印） 【宛所】元興寺住職殿	罫紙。
補遺	1	35	56	〔金銭書上〕	1	一紙	-	-	(明治以降) ---	-		
補遺	1	35	57	期日呼出状（土地明渡請求事件口頭弁論につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 9.1.16	1920	【差出】奈良区裁判所／裁判所書記 三浦富造〔朱印〕 【宛所】原告代理人／高天房五郎殿	原告元興寺、被告巽寅吉。
補遺	1	35	58	訴状（土地明渡請求事件につき）	1	綴	-	-	(明治以降) 大正 9.1.17	1920	【差出】原告代理人／高天房五郎〔朱印〕 【宛所】奈良区裁判所／御中	罫紙。
補遺	1	35	59	和解調書（土地明渡請求事件につき）	1	綴	-	-	(明治以降) 大正 9.2.14	1920	【差出】奈良区裁判所民事法廷／裁判所書記 岡田忠直／判事 岩田弥太郎	罫紙。
補遺	1	35	60	委任状（高天房五郎を訴訟代理人と定めるにつき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 ---	-	【差出】奈良市芝新屋町／元興寺住職窪田慧玉殿（朱印）	罫紙。
補遺	1	35	61	証明願（元興寺住職窪田慧玉につき）	1	一紙	-	-	(明治以降) 大正 8.12.25	1919	【差出】奈良市北市町／高天房五郎〔朱印〕 【宛所】奈良市役所／御中	罫紙。
補遺	1	35	62	元興寺什物控	1	綴	-	-	(明治以降) 昭和 2.12.26	1927	【差出】鷲尾隆慶／西村浄応／塚上雄正	罫紙。
補遺	1	35	63	地所賃借契約証	2	一紙	-	-	(明治以降) 昭和 ---	-	【宛所】元興寺住職／殿	宛所記載なし。罫紙。



## 第6章 結語

最後に、今回の調査の成果と課題をまとめておきたい。

奈良時代の元興寺は養老2年(718)の平城京移転から始まるが、五重塔の成立が遅れたのは本編でもふれたとおりである。この時期の伽藍建築では、金堂や講堂が重視されるようになっており、奈良時代より前には重要視された塔が、相対的に後回しとなっていた様子が元興寺でも明らかとなっている。今回の調査で明らかになった本堂周辺の礎石は、その石材が複数みられ、特に火山礫凝灰岩と榛原石の存在は飛鳥寺とのつながりを想起させるものである。五重塔の礎石でも、他所からの礎石の搬入の可能性が指摘でき、東塔院の成立に際しては、僧房の建築部材に飛鳥寺からの移建が想定されているように、平城京外の寺院との関わりを視野に入れ検討することが必要であり、その筆頭に飛鳥寺を挙げる事が出来るであろう。

古代元興寺伽藍の成立に関しては、境内においてはこれまでも礎石が確認されている。金堂及び講堂では安山岩、鐘楼及び五重塔では花崗岩が使用されていると考えられてきたが、今回の調査で凝灰岩及び榛原石の存在が確認されたことから、礎石として使用された石材に多様性が認められるようになった。火山礫凝灰岩と榛原石は、平城京周辺では産出しないので、付近から搬入されたものであることは明らかであり注目に値する。建物によって、使用される石材に差がみられることから、石材の選択と建物の成立時期との間に関わりがあることも想定できる。寺院の創建にあたって当時重要視された金堂及び講堂が共通して安山岩を礎石に使用していることが示唆的である。

古代から中世への過渡期については、資料がなく不明であるが、中世に入ると、正嘉元年銘をもつ「啼燈籠」が鎌倉時代中期の特徴を有するものであることが確認された。同時に、宝珠と基礎については近世以降のものである可能性が明らかとなり、これらが混在した時期については明治年間中である可能性が判明した。

中世については、「啼燈籠」のみが鎌倉時代まで遡るもので、他は15世紀のものもみられるが16世紀から17世紀初頭のもものが大半であることが明らかとなった。五輪塔や宝篋印塔、石仏など墓地に関連するものが多くみられ、極楽堂を中心に墓地が展開していた極楽坊との関わりが指摘できるものの、極楽坊内とは石造物の様相に差がみられることから、周辺地域も含めたさらなる検討が必要である。

近世については、資料が少ない。五重塔を中心に広く信仰を集めていた時期であるが、石造物の造営という部分では活動は低調である。

近代以降の石造物では、文字史料から造営の経緯を追えるものが多くみられる。水野圭真入部以降のものが多く、寄進者にも水野圭真に関わるとみられる人物の名が見られる。五重塔の焼失、廃仏毀釈を乗り越え、華嚴宗元興寺が宗教活動を行ってきた様子を伝えるものである。

以上、石造物調査から得られた成果と課題について概観した。今後、文字史料など他の歴史資料とともに、総合的に調査研究が行われていくことを望むものである。

(村田)

# 写真図版

※番号は境内石造物一覧に対応する。







No.31-1 下



No.31-2 下



No.33-1



No.33-2



No.33-3



No.33-4



No.33-5





No.33-6 (1)



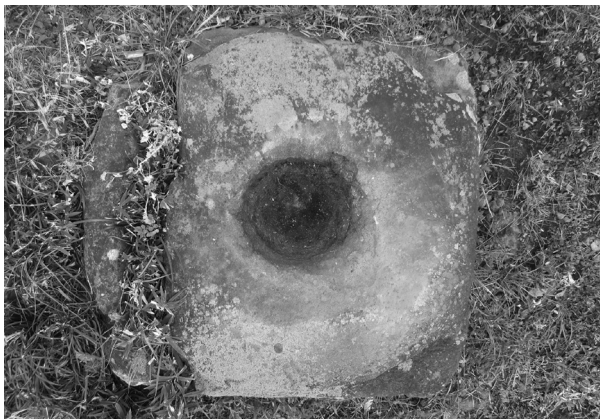
No.33-6 (2)



No.33-7



No.33-8



No.33-9 (1)



No.33-9 (2)



No.33-10



No.42





No.54



No.87 (1)



No.87 (2)



No.101



No.102



No.103



No.104



No.105





No.1 (1)



No.1 (2)



No.2



No.3 (1)



No.3 (2)

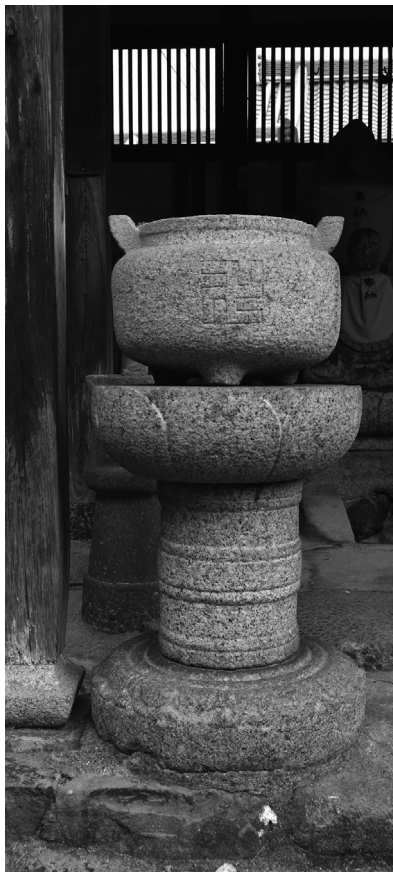


No.5





No.4



No.7



No.8-1



No.8-2



No.6 (1)



No.6 (2)





No.9 (1)



No.9 (2)



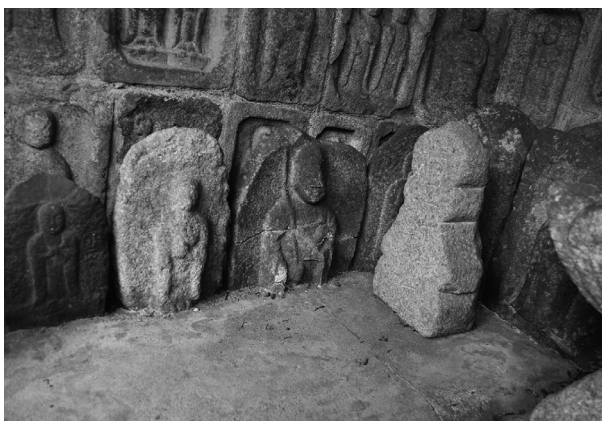
No.9 (3)



No.9 (4)



No.9 (5)



No.9 (6)



No.9 (7)





No.10



No.11



No.12



No.13



No.14



No.15





No.16



No.18



No.20



No.21



No.22



No.23

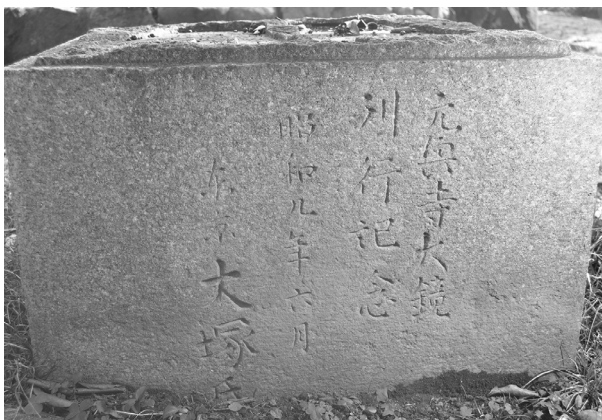




No.19



No.25



No.26 (1)



No.26 (2)



No.27



No.28



No.32





No.29



No.30



No.31-1 上



No.31-2 上



No.34



No.35



No.36 ~ 40

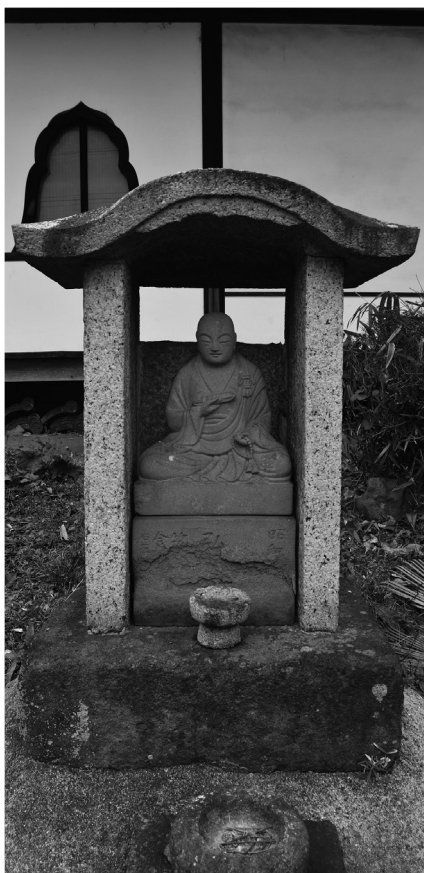




No.41



No.44



No.42



No.45-1



No.45-2



No.46

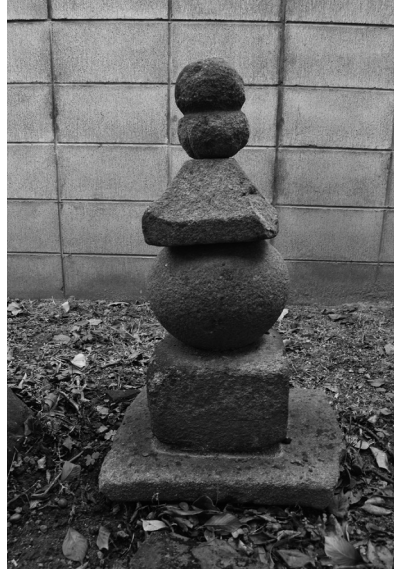


No.47





No.48



No.49



No.50



No.51



No.52



No.53



No.54



No.55



No.56





No.57



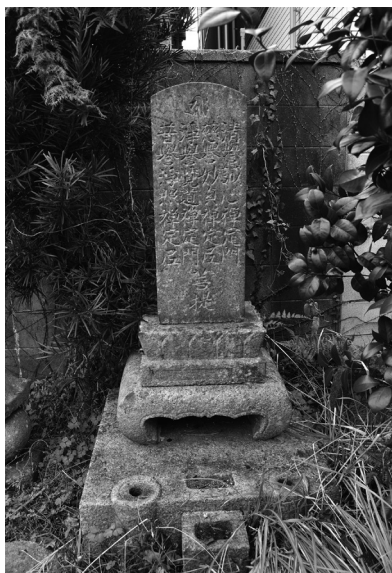
No.59



No.60



No.61



No.62



No.63



No.64



No.65



No.66





No.58



No.67



No.68



No.69



No.70



No.71



No.72



No.73





No.74



No.75



No.76



No.77



No.78



No.79





No.80



No.81



No.82



No.83



No.84



No.85



No.86



No.88





No.90-1



No.90-2



No.90-3



No.90-4



No.91



No.92



No.93



No.94





No.95



No.96



No.97



No.98



No.99



No.106

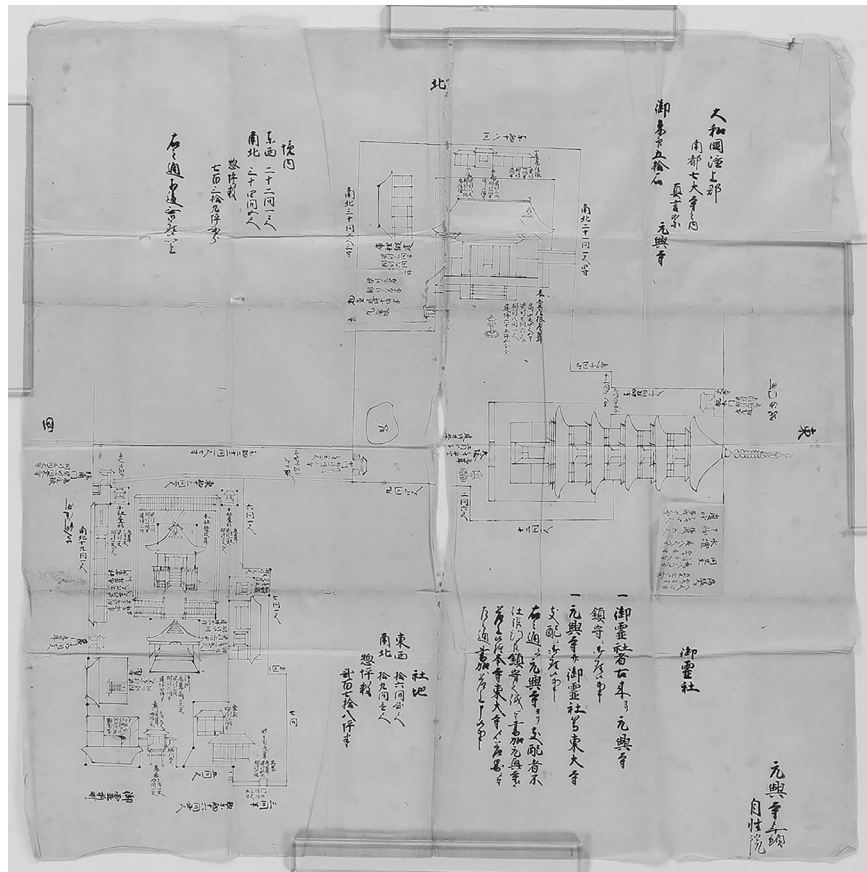


No.107

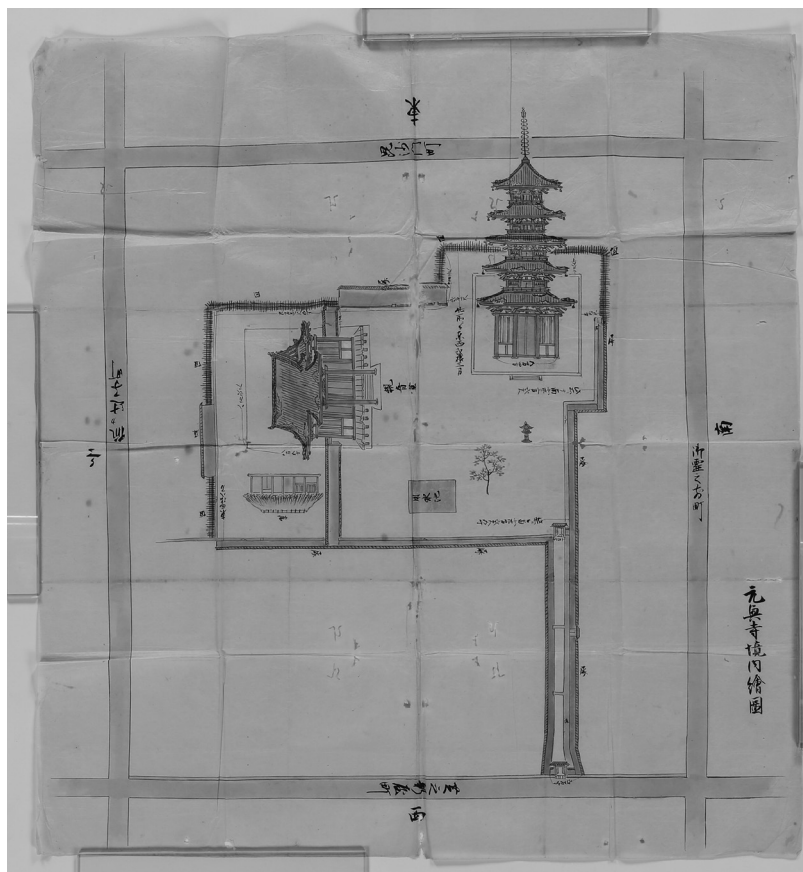


No.108



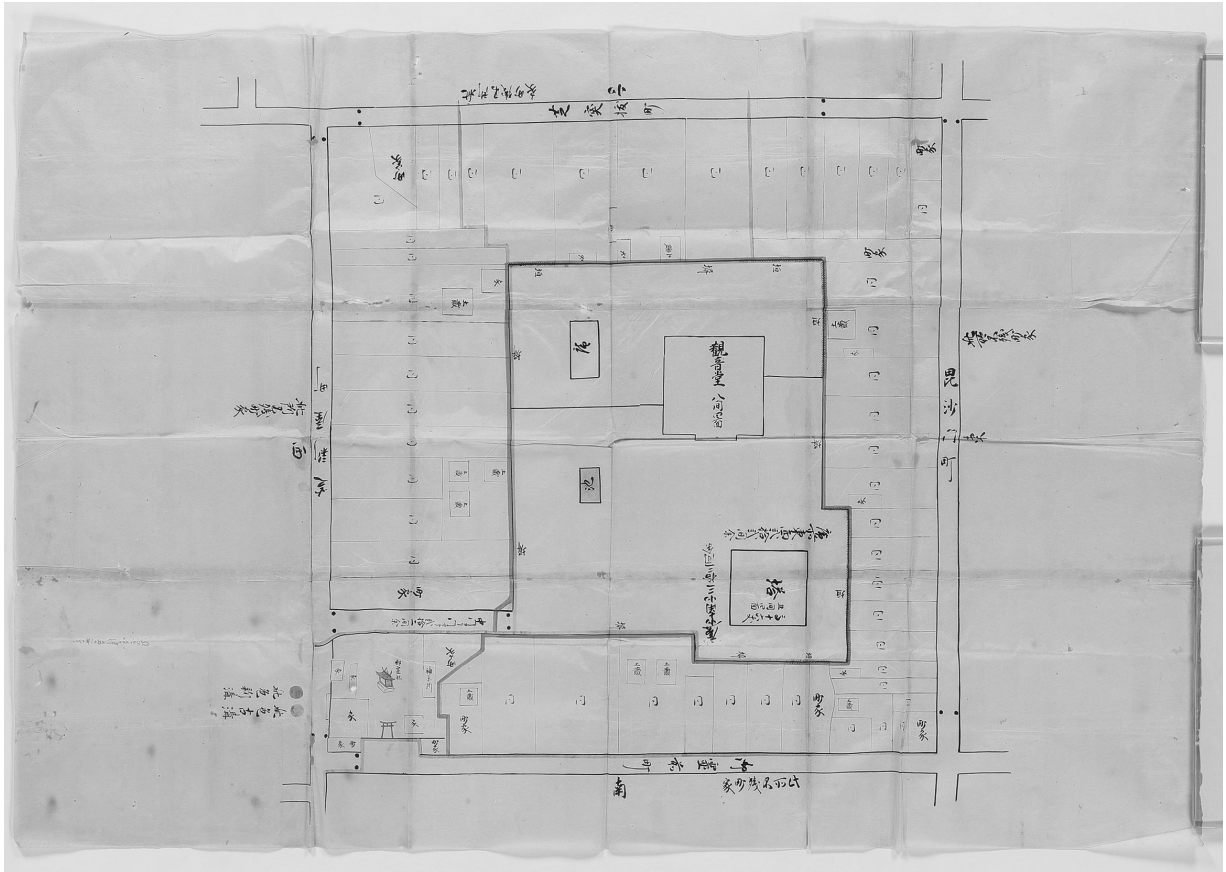


大和国添上郡南都七大寺之内真言宗元興寺 (補遺 1-1)

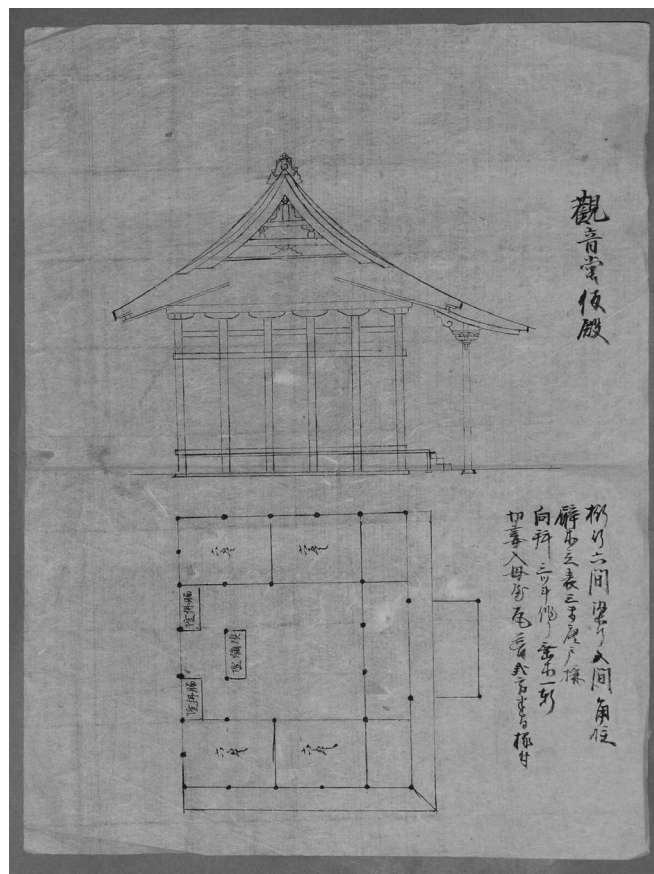


元興寺境内繪図 (補遺 1-2)

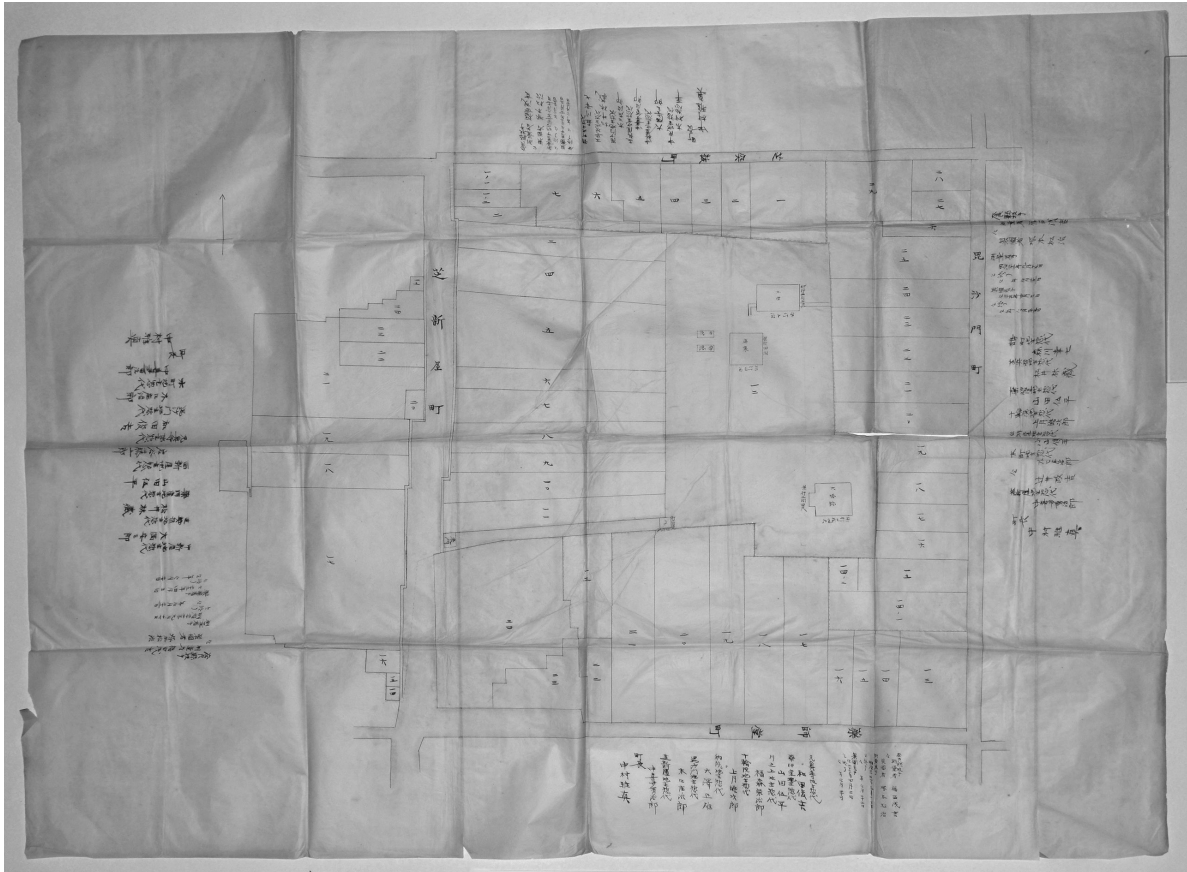




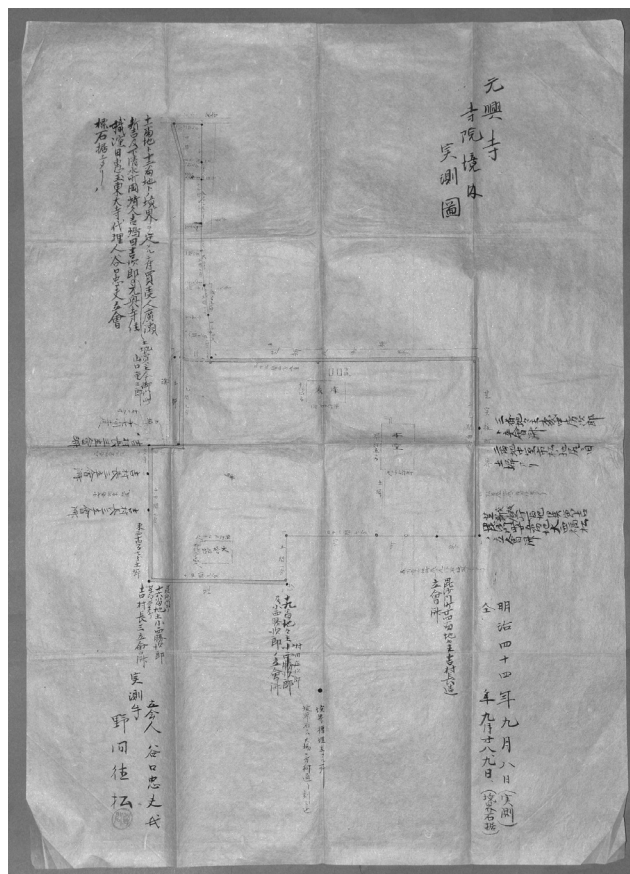
元興寺境内絵図（補遺 1-3）



觀音堂假殿（補遺 1-18）

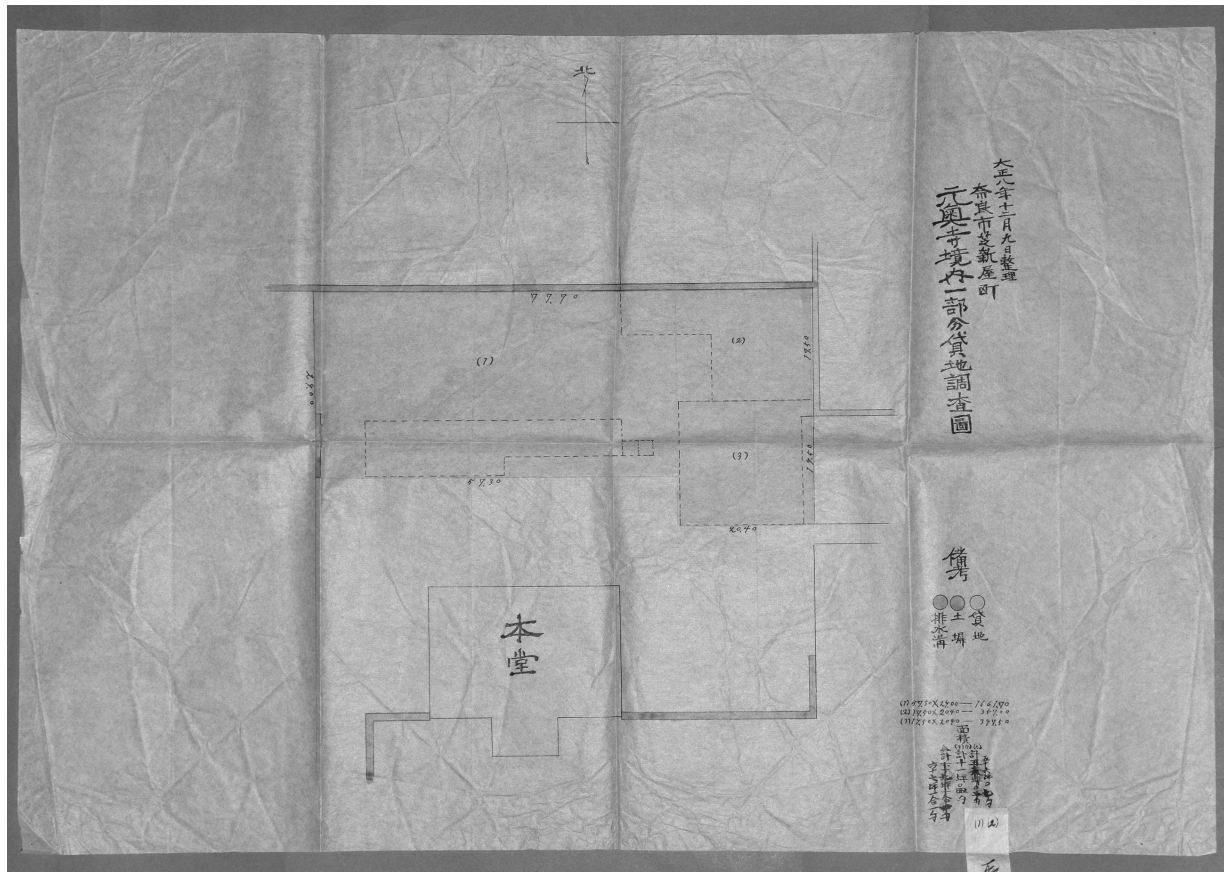


〔元興寺周辺実測図〕（補遺 1-10）

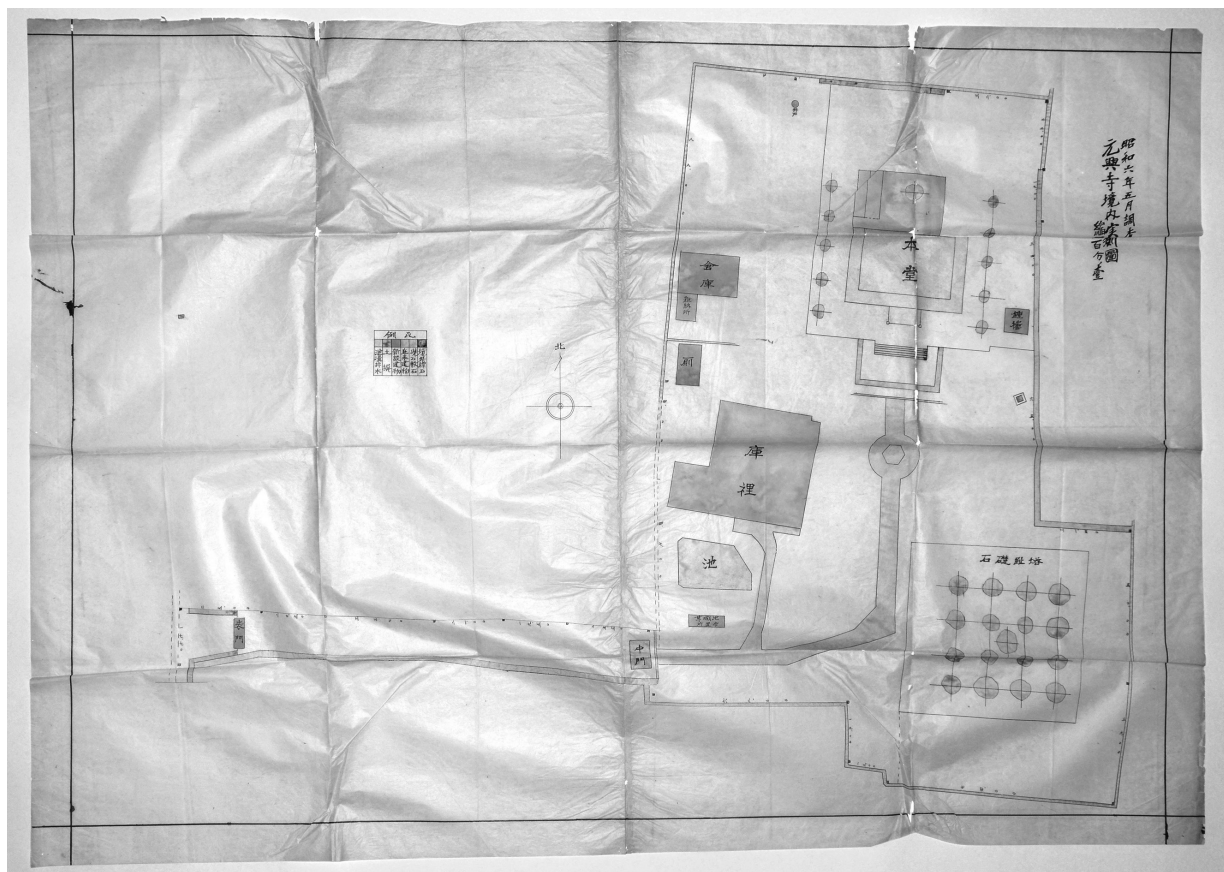


元興寺寺院境内実測図（補遺 1-6）





大正八年十二月九日整理奈良市芝新屋町元興寺境内一部分貸地調査圖 (補遺 1-25)



元興寺境内実測圖 (補遺 1-9)

華嚴宗元興寺所蔵石造物  
調査報告書

令和3年（2021）2月28日

（編集・発行）公益財団法人元興寺文化財研究所

（印刷）共同精版印刷株式会社



